



第 40 号

北海道高等学校日本史教育研究会

事務局 北海道恵庭南高等学校

〒061-1412 恵庭市白樺町4丁目1番1号

TEL 0123-32-2391 FAX 0123-32-5500

歴史と旅

北海道高等学校日本史教育研究会長 萩 島 勝 幸
(北海道室蘭栄高等学校校長)

新年あけましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひします。

実家の本棚に一冊の古い雑誌があります。長い間、目に留まることもなく、ひっそりと捨て置かれたようなその古い雑誌、『歴史と旅』1992年7月号。年輩の日本史の先生であれば一度は手にしたことがあるであろうこの月刊誌は、総合出版社秋田書店から1974年（昭和49年）に創刊された歴史雑誌です。惜しまれながら2003年（平成15年）に休刊となるまでの30年間、月刊と増刊を含めて439号が刊行されました。

歴史と旅。思えば、ずいぶんと久しく歴史を巡る旅をしていませんでした。仕事でいろいろな所に行き、そのついでに歴史名所や歴史資料館などを訪れることはあっても、歴史探訪そのものを目的とした旅は長らくご無沙汰でありました。そんな私を歴史を巡る旅の楽しさ溢れる世界へと再びいざなってくれたのが、昨年8月の新潟・佐渡巡検でありました。

8月4日から3泊4日の旅程で行われたこの巡検の内容については他の参加者の体験記をご覧いただくとして、本研究会が主催した12年ぶりの道外巡検は、10名という少数でこそありましたが、じつに示唆に富む、実りの大きな旅でありました。

12年前、平成24年に本会が実施した道外巡検の目的地は「壱岐・対馬」でした。古代・中世・近世と日本史のさまざまな場面で登場するにも関わらず、北海道に住む私たちにとって今ひとつ馴染みがない壱岐・対馬。近世をテーマとしたこの年の夏の研究大会で慶応大学の田代和生先生に日朝交易と倭館をテーマにご講演をいただいたこともあり、満を持しての対馬・壱岐への渡航でありました。この巡検で、まず驚いたのが2つの島の形でした。対馬は標高200～300mの山々が海岸線までせまっておき、平地が少なく、聞くところによると島土の約89%が山林。一方の壱岐はなだらかな丘陵が広がり、高度100mを超える山地はほとんどないとのこと。耕地に乏しい対馬は交易が生業の中心となるのに対して、壱岐は広大な穀倉地が広がっている。峻険な山地に石塁が巡らされる対馬の金田城跡（朝鮮式山城）と広大な平野に広がる壱岐の原の辻遺跡（大規模環濠集落）は、違いを象徴する対照的な遺跡でした。当たり前のことではありますが、その地域の人々は地形や地質、気候といったその土地の風土に適した生活を営み、それが連綿と引き継がれて土地の歴史となる。ともすると私達は事件や出来事とその都度切り取りがちですが、そこに生きた人々の連綿とした生活の営みや思考、嗜好などを抜きにして物事を捉えると、随分と薄っぺらい理解となってしまうであろうことを当時改めて思い知らされました。

さて、そのような中での今回の新潟・佐渡巡検だったのですが、やはり現地に行き、その環境の中に入って見て、初めてはっきりと見えてくるものが数多くありました。近世新潟港の発展の背景として、日本の河川流量全国1位と2位の信濃川と阿賀野川が17世紀半ばの洪水によって合流し、堆積していた土砂が流されたため、信濃川河岸にあった新潟湊に大型船が多数入港することになったこと（現在でも新潟港は信濃川の河口部に位置しています）。新潟湊が北前船の寄港地となってからも、海流と風の影響から対岸の佐渡に風待ち港が求められる中、陸繁島である城山によって絶好の風除け入江であった佐渡小木湊が北前船の重要な寄港地として発展し、一時期は新潟湊と肩を並べるほどの船が往来したこと。併せて、小木湊近郊の宿根木集落では船主の他、船大工などが多数集住し、その町並みは今もなお当時の名残をとどめていることなど、実際に現地を歩き、当時の人の営みに思いを巡らせることによって、より深くその地の歴史を感じ取ることができたのです。

学習指導要領が謳う地歴科の目標の1つに「地理や歴史に関わる事象の意味や意義、特色や相互の関連を、概念などを活用して多面的・多角的に考察したり、社会に見られる課題の解決に向けて構想したりする力や、考察、構想したことを効果的に説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。」があります。歴史を巡る旅が私達にもたらしてくれるもの、それは次代を担う生徒に身に付けさせたい資質・能力と重なり合っている気がします。そこには、授業づくりのさまざまなヒントが見え隠れしているとも感じます。講習や部活動の指導、大会引率など、超えなければならぬハードルはたくさんあります。しかし、一人でも多くの歴史好きの先生に歴史を巡る旅に出たい。あまりに一方的で押しつけがましい話で恐縮ではありますが、そんな期待を胸にご挨拶を閉じさせていただきたいと存じます。

今後とも、何卒よろしくお願ひいたします。

◇第47回 (2024) 北海道高等学校日本史教育研究大会 講演記録①

北方産品と「北前船」

東京理科大学教養教育研究院専任講師 菅原慶郎氏

文 泉 宏 和 (北海道岩見沢東高等学校)

1 はじめに～北方産品流通事始め～

北方とは、現在の北海道とその周辺(サハリン・千島)を指し、江戸期には和人地である松前藩領と蝦夷地(東・西・北)から成り立っていた。

北方産品の大半は、三大産品であるニシン・サケ・コンブをはじめ、俵物のナマコ・アワビ、ラッコ皮など多種に及ぶ海産物である。加えて江戸後期以降には熊胆・ワシ羽、アットゥシ(アイヌが木の皮で作った衣服)、蝦夷錦・ガラス玉(山丹交易で入手した中国製品)なども「北前船」によって本州へと流通していく。

2 「北前船」の流通システム

「北前船」の定義は、慶応義塾大学の中西聡教授によると「本州・四国・九州などに拠点をもち、18・19世紀に北海道へ進出した商人船主の船」とされる。しかし、加賀藩では藩が船を自ら動かして経済活動を行っている事例がある。また、「北前船」という呼称は後世に広まったものであり、当時は船型から「弁財船」、アイヌの人たちは「ベンチャイ」と呼んでいたことが記録に残っている。それらのことより「通称「北前船」として演題にもカギ括弧付きで表記した。

18世紀後半に、それまで松前交易に携わっていた近江商人の荷所船(運賃積)が衰退すると、荷所船仲間が独立して各地の商品価格差を利用して商売をする買積を始めた。このことが「北前船」の誕生とされている。北方産品は、商品生産地である蝦夷地の各場所から松前三湊(松前・江差・箱館)に運ばれる。「北前船」は、三湊の沖の口番所に一種の関税を支払ってその北方産品を積み込み、本州へと運んだ。この時に流通ルートも変化し、近江商人の押さえる敦賀で荷揚げせず、下関を回り瀬戸内海を経由して直接大坂に運ぶルートがとられるようになった。

明治期になり、沖の口番所が廃止され、北海道各地へ本州方面から直接船が入り込むようになると「北前船」は活況を呈するようになる。しかし、電信・鉄道の普及などの近代化が進んで全国の商品価格差がほぼ消滅していくと、買積で利益を上げていた「北前船」の経営は立ち行かなくなり、19世紀末には遠距離交易は大型汽船・運賃積による近代的な流通市場へと移行していった。「北前船」は衰退していった。

3 北方産品①～ナマコ・アワビ～

中国へ輸出する長崎俵物に煎海鼠・干鮑があるが、煎海鼠が3割、干鮑が4割と北方産のナマコ・アワビの占める割合が大きく商品価値も高かった。「長崎元俵物請方雑書」所収の「松前煎海鼠干鮑昆布出方浦名帳」によると、ナマコは全道的に採取している一方で、アワビは松前城下から江差・奥尻島付近の日本海側を中心に採取していることが分かる。

現在の小樽市西部に位置するタカシマ・オショロ場所の事例からは、収穫時期は夏季であること、ナマコは和人が地引網的なものを用いて収穫するが、アワビは「土人共漁獲高」と記録されており、アイヌの女性たちだけが収穫して干しアワビを生産していることが見て取れる。

4 北方産品②～コンブ～

コンブは松前・蝦夷地から中国向け商品(長崎のみならず薩摩・琉球を通して中国へ運ばれた)として最も多く運搬された。俵物のナマコ・アワビと比較して生産量が多いため、中国輸出の規定量を越えた残り(生産量の半分以上)は大坂に回って国内にも広く流通した。需要の高まりはコンブの商品価値を高め、生産地も箱館・室蘭から19世紀には蝦夷地全域に拡大して、志苔昆布などブランド化も進んだ。『北海道漁業志稿』によると、襟裳岬西部の幌泉が一大生産地であった。

現在の十勝地方に位置するトカチ場所の事例からは、十勝川の内陸部に住むアイヌたちも収穫時期の夏季には浜(襟裳岬東部の庶野)まで出てくること、さらには場所請負商人の求めで幌泉まで出稼ぎに出ていることが分かる。コンブは漁期も長く、トカチ場所では生産物の7割以上を昆布が占めていた。

「申年松前・南部・津軽 壹番立・弐番立雇船船名前書付」をもとに、18世紀後半の長崎俵物・コンブを運搬した御雇船の積荷を見ると、98%をコンブが占めている。ナマコ・アワビは単価が高いが少量であり、コンブは低価だが数量の多さで儲けを生み出し、長崎貿易を支えていた。

5 ラッコ

ラッコは千島からアリューシャン列島、アメリカ西海岸までが分布域で、北方産品としてはウルフ島でアイヌが捕獲し、場所請負商人が米・金属製品などと物々交換で入手した。その毛皮は非常に高価な珍品として江戸幕府に献上

され、また長崎貿易で中国にも輸出された。

長崎貿易では18世紀にアザラシ皮も輸出されていたが中国人には不評で、その後ラッコ皮の輸出が中心になる。18世紀末には定額制となり集荷が強化されて、多くのラッコ皮が輸出されたことが『唐船輸出入品数量一覧 1637～1833』より見て取れる。

19世紀、日露間でウルフ島・択捉島間に国境が引かれると、北方産品としてのラッコ皮の流通は松前からほぼ消滅していった。

6 まとめにかえて

～北方産品流通事納め～

北方産品の見積高は、三大産品であるニシン・サケ・コンブがそれぞれ72%・9%・9%で9割を占める。残り1割の中に先述したナマコ・アワビ・ラッコ皮やイワシなどが入ることになる。「北前船」は多種の、また総量としても大量の北方産品を大坂へ廻送していく中で、寄港地間での物品往来にも大きく寄与していった。

石川県の輪島や能登など複数の神社に「イナウ奉納額」が残されている。イナウはアイヌの人々が神に祈る際に捧げるものであるが、それが2本組で神社の奉納額の中に入れられているのである。大量のサケが獲れた祝いとして、アイヌが海産物とともにイナウを差し出したことが記録されている文書がある。イナウを和人は本州へ運び、海上交通の安全を祈願して神社へと奉納した。この「イナウ奉納額」は、アイヌの宗教観が「北前船」を通して本州へ波及したものとして近年注目されている興味深い資料である。

北海道高等学校日本史教育研究会
第48回研究大会(ご案内)

日時 2025年8月7日(木)

9時30分～15時30分

会場 未定

講師 北海学園大学人文学部教授

郡 司 淳 氏

「在郷軍人会など地域と軍隊の関係」

(予定)

広島大学大学院人間社会科学部研究科教授

小 池 聖 一 氏

「満洲事変とワシントン体制の関係」

(予定)

◇第47回 (2024) 北海道高等学校日本史教育研究大会 講演記録②

貿易都市長崎と長崎奉行

花園大学文学部日本史学科教授 鈴木康子氏

文 見山智宣 (札幌日本大学高等学校)

はじめに

九州の最西端に位置する長崎は、江戸時代には、外国との交易が許された唯一の港であり、しかも九州内最大の都市でもあった。その地を支配するのは遠国奉行の長崎奉行であった。この地の地下人(長崎市民)たちは自治意識も強く、貿易も複雑であったため、長崎奉行による統治も容易なことではなかった。本講演では、長崎の開港から18世紀末の松平定信による寛政改革にいたるまでの長崎の推移を、貿易仕法の変遷、長崎奉行の役割や貿易改革などを通じて考える。

1 長崎の開港

1550年にドアルテ・ダ・ガーマのポルトガル船が平戸に入港した。そして、1553年以降、ポルトガル船が毎年、平戸に入港するようになる。その後平戸での布教活動は盛んとなるが、それに対する仏教徒の反抗も激しくなっていた。この地の領主である松浦隆信はキリスト教に入信せず、貿易利益のみを求めた。そうした状況下、1561年にポルトガル人と日本人の争いが激化し、ポルトガル船長と14人のポルトガル人が殺害された。これによりポルトガル人は貿易拠点となる新港を探し始めた。そして、翌1562年もポルトガル人は平戸から南下した横瀬浦に港を移転した。この地は大村純忠の領地で、純忠は教会のための土地を寄進し、貿易条件もよかった。純忠はキリスト教に入信し、バルトロメウという洗礼名を受けた。しかし、松浦の襲撃を受け、ポルトガル人は横瀬浦を放棄し、さらに南下して福田に落ち着いたが、ここでも松浦の攻撃を受けた。そのため、1570年に福田よりさらに深い入り江を行った最奥の地、長崎を新たなポルトガル貿易の拠点と決めた。

その後、1580年には大村純忠が教会領としてイエズス会に長崎を寄進した(とされている)。そして1587年秀吉が九州平定を終えた後、博多においてバテレン追放令を發布し、この時、長崎は秀吉の天領となった。そのため、ここに長崎代官(後に奉行)が置かれるようになった。

3 長崎奉行制度の確立

江戸時代初期における長崎奉行は、將軍や幕府の買物係的な役割を果たしていたため、外国船が来航する頃に長崎に向かい、帰港するまで長崎に滞在し、その後は江戸へ戻った。1612年にキリスト教禁止令が發布されると、キリシタン取締りが長崎奉行の新たな任務として加え

られた。その後キリシタン取締りは1623年の大殉教後はさらに強化されていく。

1628年に異例ともいえる外様大名の竹中采女正重の不正が発覚し、1633年に免職の上、切腹となった。これを受けて長崎奉行は2人制となり、寛永十年禁令が發布された。

そして、1637年に勃発した島原の乱は、長崎奉行が不在のときに起こった。そのため、この乱が収束した後、長崎奉行が長崎に常駐するようになった。そして、1639年にはポルトガルとの断絶命令が出され、1641年に、それまで松浦領内の平戸にオランダ商館が設置されていたが、これを長崎の出島に移転させ、長崎奉行の監視下に置いた。こうして長崎奉行は、長崎の統治はもとより、唯一の外国との交易が許されている地であるため、その貿易の監視、キリシタン対策、九州大名の監督、九州で反乱などが起きた際には陣頭指揮をとるなど、幕府の九州支配における重要な役割を担う存在となった。

4 長崎貿易仕法の変遷

1604年に糸割符仕法が制定され、当時中国生糸をほぼ独占的に輸入していたポルトガルに対して、幕府側が価格決定権を掌握し、その価格ですべて買い取る方法が導入された。それが1655年に廃止となり、外国人と国内商人が相対に貿易できるようになった。これにより輸入品価格は上昇し、その見返りとして輸出する銀が大量に国外に流出した。そのため1660年代に入ると幕府は贋沢品の輸入を禁止したり、1668年には一時的に銀の輸出を禁止した。そして1672年には市法貨物仕法を制定した。これは貨物商人を組織し、輸入品価格を決定し、購入した輸入品を国内商人に入札させて売り渡す方法で、この利ぎやは仕法増銀とされ、貿易に関わる諸経費や長崎市中へ流れた。

1685年には前年清国が海外貿易禁止の政策を撤回し、貿易を許可する展海令を發布したため、大陸からの貿易船が多数日本へ来航することが予想され、それに対する対処もあり、御定高が創設され、年間商売額は唐船に対して銀6,000貫、オランダ船に金5万両までと制限した。そして、唐船の年間来航船数も70艘に規制された。それとともに、それまで長崎市中に居住していた唐人を1688年に唐人屋敷にのみ居住させた。1698年には長崎会所が設立され、翌99年現職の勘定奉行萩原重秀が「唐阿蘭陀貿易見分」とし

て長崎を訪れ、その直後から長崎に運上金が課された。

1715年には、正徳新例(長崎新例、海船互市新例)が制定された。これは幕府による初めての長崎貿易に関する詳細な規定であった。これには長崎目付の設置や御定高制度よりさらに縮小させた貿易額が示された。すなわち、年間貿易額唐船3,000貫目・オランダ船2万5千両、年間銅輸出量唐船300万斤、オランダ船150万斤、来航船数唐船30艘、オランダ船2艘となった。

その後、1732年の西国を襲った大飢饉の影響を受け、長崎は大混乱となり、貿易に使う資金も長崎奉行大森山城守が米購入に充当した。そのため、これ以後、貿易は円滑にいかず、幕府からの借金で維持することができ、幕府からの運上金も納められない状態が続いた。その結果、1742・43年に貿易額半減令が發布された。これに対して、唐人やオランダ人から激しい反発を受け、この命令は、事実上内容通りに実施されなかったが、長崎貿易の衰退化傾向は止まらなかった。

5 18世紀中期の長崎貿易改革

1748年に現職の勘定奉行松浦河内守信正が長崎奉行を兼職して長崎貿易改革を断行した。松浦は、まず1746年には幕府からの拝借金が21万両余になっていたため、これを14年賦(年に1万5千両)で返却することとした。そして、享保の大飢饉以後増加した長崎地下役人数と、各役職の給料の調整を行った。また、唐船の年間来航船数を30艘から15艘に減らし、1船の取引額を銀270貫目と規定した。一方オランダ人の貿易改善の要求に対しては断固として拒否し、貿易断絶も辞さない態度を示し、現状維持で合意させた。

1762年には再び、現職の勘定奉行石谷備後守清昌が長崎奉行を兼職し、改革を実施した。主な政策は以下の通りである。

- (1) 金銀輸入: これまで輸出していた金銀を主に唐船により逆輸入するようになった。これは新たな貨幣製造(五匁銀・南鐮式朱銀)の原料不足を補うためである。
- (2) 勘定所役人の長崎常駐制度: 複雑な長崎貿易を把握・監査するため、勘定所において世襲的に財政専門を担ってきた役人である「支配勘定」2人が常時長崎に滞在した。これにより、長崎貿易に関して十分な知識を備えた勘定所役人、たとえば松山惣右衛門な

どが頭角を現し、その知識・経験により、幕府は長崎貿易の改革をよりの確に細部に至るまで介入し、実施できるようになっていった。

(3) オランダ船貿易の縮小：オランダ船については、1745年以来、年間銅輸出力は110万斤であったが80万斤に減額された。

6 18世紀の抜荷対策

新井白石の政策とされる1715年の正徳新例の大きな目的は貿易縮小であり、これ以降8代将軍吉宗もこの政策を継承することとなる。これにより、抜荷が急増し、その対策が幕府の貿易政策の中でも重要な課題となって浮上してきた。当初は、抜荷対策はもっぱら唐船に対するものが殆どであった。しかし、1772年にブルフ号事件が発覚し、これにより商館長も含めた上層部も抜荷に関与していたことが露見した。そのうえ1774年にもオランダ船乗務員や出島内での抜荷が発覚した。そのため幕府は1775年に17ヶ条からなる抜荷禁止令を發布し、参府中の商館長に対しても直接叱責した。

1783年に工藤平助は有名な『赤蝦夷風説考』を著したが、この時同時に、長崎貿易改革を示唆した「報国以言」を田沼意次に提出した。その中で工藤は、長崎貿易改革で最も重要視すべきは抜荷対策であり、正規の貿易ルート以外で多くの商品が輸入され、それにより大量の銅が流出していく現状を憂慮した。ここでは、その抜荷根絶のための政策をいくつか提示している。

7 1780年代の混乱と長崎奉行の死去

1789年に勃発したフランス革命後、アジアにおけるイギリスの勢力が拡大し、オランダ船は1782年に日本に來航できず、国内では天明の大飢饉の影響が長崎にも及び、長崎は混乱状態に陥った。長崎からの諸運上金も不納となり、長崎奉行久世丹後守は、長崎用意銀3,000貫目も長崎の運用にすべて使い果たした。この混乱の收拾と新たな貿易改革を実施するため長崎奉行として戸田出雲守氏孟が任命されたが、長崎に赴任して1年後急死した。この1770年代から1800年代に長崎在勤の長崎奉行の死去が目立っている。長崎奉行に着任すると莫大な利益が入るとのイメージがある。しかし、実際には、長崎奉行は、長崎と江戸を隔年で移動し、そのうえ、江戸から遠く離れた長崎で、それも自治意識の高い地下人の中で、幕府の政策を実施していくことは相当難しく心身ともに負担が大きかった。

8 寛政改革

松平定信は、1787年に筆頭老中となり、寛政の改革を始めたのは周知の通りである。しかし、長崎と長崎貿易に関す

る改革について、これまで詳細な内容については殆ど知られていない。長崎における寛政改革は1790年から始まった。この時、長崎奉行水野若狭守は勘定奉行格となり、それまで何度も長崎に滞在経験のある勘定役の松山惣右衛門を勘定組頭として長崎に送り込んだ。松山は、今後の長崎の動静を窺うために5年間の長崎滞在を命じられた。

長崎の寛政改革の実態を知るうえで、まず、松平定信は自伝的な記録である『宇下人言』における長崎に言及した部分に注目する。これまで、この一部分だけを上げて検討することがなされてきた。しかし、全体を概観する必要がある、それをまとめると、①輸出優遇策、②半減売買の実施、③オランダ貿易排除と唐船の優遇、④会所の衰退と抜荷対策、⑤貿易関係以外の職業の奨励、⑥貧民対策、⑦長崎奉行への言及となる。それに加えて『翁草』に「長崎法令改正」として寛政改革において長崎市中や地下役人に出された68件ほどの書状が収められている。それを集計し分析すると、a 長崎地下人全体への訓示、b 長崎会所関係、c 改正に伴う担当の「取計方」などの任命、d 地下役人の人事異動、役人の褒賞、e 江戸参府と年頭拝礼関係、f オランダ貿易関係、g 唐船関係、h 除き者など特別取引、i 長崎奉行関係、j その他に分類できる。これら二つを基本的な史料とし、それ以外の史料をも加えて長崎における寛政改革における新たな政策について考察した。

(1) 半減商売と江戸参府

長崎貿易における寛政改革というと、まず必ず提示されるのが「半減商売」という文言と、オランダ貿易の年間銅輸出力が60万斤とされ、來航船数は1艘、江戸参府は5年目に一度となったことである。しかし、それまでの銅輸出力は1768年に90万斤となったので45万斤である。貿易額についても半減されてはいない。結論として定信は、この改革における貿易制限政策を、吉宗の時代である1742・3年に出示された半減政策が守られていないことを念頭に、それを遵守する政策として同じ文言を使ったと考えられる。

また、江戸参府はそれまで毎年なされていたが、ここで5年目に一度とされた。この背景には、①抜荷への警戒：唐人には許されていない江戸への国内旅行ができる中での各宿泊所での取引などを防ぐため。②江戸における請願：オランダ人が幕閣に直接貿易改善について請願をさせない。③オランダ人と諸地域での知識人との交流の警戒：定信は蘭学を奨励するというよりも警戒感が強かったように見える。蘭学により過激な思想が生じる可能性に配慮。④江戸参府ルート周辺の諸藩や助郷などへの負担軽減：天明の大

飢饉の時期にあたり、江戸の諸藩が疲弊していたことも考慮された可能性がある。なお、唐船に関しては「半減商売」という言葉は一切使われておらず、厳しい制限はなされていない。

(2) 抜荷禁止令

定信は『宇下人言』において「抜荷の禁を専らとすべし」と述べ1788年12月に抜荷禁止令を發布している。8代将軍吉宗は、抜荷を行った者に対し、寛刑策を採り、それまで抜荷は死罪とされ厳罰に処せられてきたものを、1718年に遠島や追放などに処すことを命じた。そのため、貿易縮小政策の進行と、この寛刑策実施のために。その後抜荷は増加の一途を辿ることになる。定信は、基本的に吉宗の政策の継承や、その時代の状態に戻そうとする方針が見えるが、この吉宗の寛刑策は転換し、1790年正月に抜荷は死罪と命じた。

(3) 地下人政策

幕府は地下役人の人事にも深く介入し、熱心に勤務する者には褒賞を与えたり、さらなる高い役職に昇進させたりした。地下人対策として特に注目すべきは、①貿易以外の産業の奨励：長崎の地下人の多くが貿易関連の就業者であり、一旦貿易が不振に陥ると多大な影響を蒙ることになる。そのため、貿易以外の産業、陶器や織物などを奨励した。そして、1791年には新たな産業へ就業する者に融資するため、産業方を設置した。②無宿人対策：長崎は九州で最大の都市であり、しかも外国貿易がなされていた幕府領であったため、江戸と同様に周辺地域から多くの者が流入して下層民層が増加していった。そこで、1790年に江戸で旧里帰農令が發布されると、長崎においても同様の命令が出された。また定信は、長崎周辺の海浜を埋め立てて新田を作り、そこに住ませるようにと述べている。

また、1791年には江戸の人足寄場のような無宿人の寄場が長崎郷に設置された。この寄場は、四方を塀で隔てて、その中に牢屋のような長屋を建てたものである。その中で無宿者を働かせ、賃銭を与え、人柄がよくなったら市中への居住も許された。後に、この施設は浦上村に移される。さらに、佐渡金銀山の水汲人夫として派遣する試みがなされた。1793年に無宿者18人を佐渡へ送ったが、結局、往復に3ヶ月もかかり、しかも資金は多額となったため、この試みは1回のみで終了した。その他、1789年には囲米のために土地を購入し、その後長崎奉行の資金により米粗が順次貯蓄されるようになった。

◇令和6 (2024) 年度北海道高等学校日本史教育研究会巡検研修

新潟・佐渡・村上 概況並びに参加報告

北海道高等学校日本史教育研究会巡検研修の概要報告

北海道高等学校日本史教育研究会事務局長 國 岡 健
(北海道恵庭南高等学校)

2024年度本会事業の一つとして企画した新潟市・佐渡島・村上市巡検は、荻島会長をはじめ10名の参加により実施し、無事終了しました。ここに旅程を略述し、事業の報告とさせていただきます。

8月4日(日)

巡検初日9:25に新千歳空港を出発し、10:35に新潟空港に到着、空港内で昼食を済ませて「新潟市歴史博物館(みなとぴあ)」へと向かった。開催中の企画展「北前舟と新潟一廻船と日本海海運の時代」を学芸員の解説で見学、関係する古文書や古地図、古写真とともに、北前舟で使われた船筆筒や幟が展示されていた。特に印象深かったのが、地域間格差を利用して利益を生み出す北前舟の生命線とも言える、商品の相場情報を伝えた電報文書群であった。文書の筆遣いから船主たちの一喜一憂する息遣いが聞こえてきそうで、史料の持つ魅力を感じた。8月1日の研究大会の講演とも相まって有益な学びとなった。旧新潟税関庁舎も敷地内にあり、日米修好通商条約における五港の一つとしての新潟を象徴する歴史的建造物・国の重要文化財でもあった。旧第四銀行住吉町支店も敷地内に移築されるなど、二代目の新潟市庁舎(1911年・明治44年建築)を模して造られた博物館とともに、歴史体験ゾーンとして感慨深い空間であった。

江戸後期の商家で、明治に入ってから政財界の要職も務めた小澤家の店舗を兼ねた「旧小澤家住居」(新潟市文化財)と、新潟三大財閥の一つ「旧斎藤家別邸」(新潟市文化財)の豪邸と回遊式庭園をじっくりと見学した。北前船の寄港地であり、商都として栄えた新潟の地に足を踏み入れたことを実感した初日であった。この日は新潟市内に宿泊した。

8月5日(月)

8:55に佐渡島を目ざし新潟港を出港。多数飛来するカモメを随伴した2時間半に及ぶ船旅となった。佐渡島両津港に到着し、「トキの森公園」へ。トキ資料展示館ではトキの生態や保護増殖活動について学び、飼育ケージでニッポニア・ニッポン(トキの学名)と間近で遭遇、しばし静観。次に鎌倉時代に承久の乱で佐渡島に配流となった順徳上皇の行宮跡地の「黒木御所跡」を訪問、遠く離れた地にやってきた当人の心境に思いを寄せた。

次に佐渡金銀山関係の施設と史跡探訪へ。佐渡金銀山の中心地にある「相川郷土博物館」は、旧鉱山本部事務所(国指定史跡及び重要な文化的景観)を利用した施設で、鉱山の歴史、金銀の生産工程、鉱山経営の変遷などを詳細に解説した展示物を見学した。中でも印象深かったのが、朝鮮半島出身者を含む鉱山労働者について解説した展示コーナーで、ユネスコの世界遺産認定に関しての韓国との協議の結果をふまえた展示とのことで、「佐渡鉱山で働いた朝鮮半島出身労働者は、削岩、支柱、運搬などの危険な坑内作業に従事した者の割合が高かった」などの説明があった。日韓両国関係者間での「現在と過去との対話」の結果を反映したものと考えるところ、見る側としては、そうした経緯をふまえて、読み込む必要性を感じた。劣悪な労働環境をめぐっての労働争議や、作業での死亡事故を記録した「特高月報」などの貴重な展示物もあった。しかし、まだまだ発展途上、研究成果をふまえたさらなる内容の充実が求められると感じた。

「佐渡奉行所跡」は、発掘調査によって出土した遺物の展示と共に、選鉱作業工程が実物展示されており、その仕組みについてガイドから詳細な説明を受けた。微量な金銀まで残さず收拾しようとする、その念入りな作業工程からは、この地で産出される鉱物がいかに貴重なものであるか、また、佐渡金銀山の経営が幕府にとって、いかに国家的な事業であったかを彷彿させるものであった。他大名を圧倒した経済力の源泉のひとつであり、貨幣鑄造権を独占した江戸幕府が佐渡島を直轄地とし、その経営と統治に力を入れた情景が浮かび上がってきた。

最後は「史跡佐渡金山」。まずは、江戸初期から実際に採掘に使われた地下坑道を巡る「江戸金山絵巻コース・宗太夫坑」に潜入。猛暑を忘れさせてくれるひんやりとした暗い空間に身を置くと、採掘現場の臨場感たっぷり、時折姿を現す坑夫人形の会話と動きが、過酷な労働実態を伺わせた。近代国家となってから1989年(平成元年)の操業停止まで使われていた、「明治官宮鉱山コース」では操業時の姿のままにトロッコなどが保存されていた。約1時間の地下潜入から地上に復帰して見た割戸(鉱山の上から坑道までを楯に掘っていったこと)は圧巻であった。余韻覚めやらぬままにこの日の行動を終えた。



博物館内展示の北前船



旧新潟税関庁舎



順徳院御配所跡

8月6日(火)

佐渡島での2日目の朝、「佐渡市立博物館」を訪問、佐渡の自然、歴史、文化を総合的に学んだ。上述の順徳上皇をはじめ、日蓮、世阿弥などの流人と彼らがもたらした遺品が残されており、中世における流人を通じた文化交流の実態がわかった。また須恵器窯跡や砂鉄製錬跡も紹介されており佐渡の古代にも関心を持った。

配流後をこの地で過ごし、ついに帰京することなく生涯を終えた順徳上皇の墓所「真野御陵」を訪問した。人里離れた静謐の地にあり、敷地内に自生している巨木に長い年月の経過を感じると共に、その周囲の様子から厳格に管理され続けてきた印象を持った。前日の「黒木御所跡」とあわせて、承久の乱の終焉の地の一つとして記憶にとどめたいと思った。

「小木民俗博物館・千石船・白山丸」を見学、まずは実物大に復元された北前船白山丸の雄姿に圧倒、船内部に入り探索、ガイドから詳細な説明を受けその造の工夫に深い感銘を受けた。博物館には島民が使っていた神棚、食器、船大工道具、漁撈用具、各地からもたらされた人形などの民俗資料約3万点が所狭しとひしめいており、島人の生活の匂いに満ちていた。こうした史料を収集して保存、展示する営みに、歴史を学ぶ者としてあらためて感謝すると共に、その志に敬意を表する気持ちを強くした。

いよいよ、「宿根木集落」、実は今回の目玉企画である。ガイドと共に路地を巡り、建物内部に入り込んで当時の生活の一端を疑似体験したりと贅沢なもので、北前船の寄港地佐渡島に暮らした人々の日常、そしてその船産業に従事した人々の息遣いを感じた。これら貴重な建物を息長く保存した、まさに歴史遺産と言える街並みであった。猛暑の中歩き回ったためかなりの強行軍であったが、心地よい疲労感を覚えながらこの日を終えた。

8月7日(水)

9:15に両津港より出港、佐渡を後にした。2時間半の船旅、一行にもそろそろ疲れが見え始め、口数も少なくなってきた。新潟港到着後は最後の巡検地、鮭食文化の町として有名な城下町の村上市へ。まずは1626年(寛永3年)創業の老舗「きっかわ」を訪問し、店内に吊るされた塩引き鮭の姿を拝見。北海道民の私達には馴染み深い鮭だが、一味違った姿に感動した。店員からその仕込み方と歴史を含めて詳細な説明を受け、店内の品々を少しばかり試食もした。当地は鮭とは古代以来の付き合いで、藩政時代に地域産物の象徴として位置づけられ産業振興の中核でもあったとのことで、歴史の重みを感じる鮭との出会いとなった。残りの時間は江戸城下町の風情を感じる街並みの散策をしながら古刹の見学をして新潟空港へと向かった。いよいよ2泊3日の巡検も終わりかと思いきや・・・。

※搭乗直前で飛行機のトラブルが発生、故郷北海道に行きかけていた気持ちを今一度北陸にとどめた。巡検団一同、歴史を学ぶ者らしく、これも悠久の歴史のコマ、と寛容な心で受け入れ、新潟市内でもう一泊することとなった。

※翌日、無事、帰道。

12年ぶりに巡検を企画し実施しました。無事に終わりますのはホッとしています。みなさん、楽しんで学んでいただけましたでしょうか。今回の学びが、みなさんの知見をさらに広め、日々の日本史の研究と授業実践に活かしていただけましたら幸いです。参加して頂いた皆さん、本企画に御理解、御協力して頂いた全ての方に感謝いたします。有難うございました。最後になりますが、企画段階から御助言いただき、旅程の作成に御尽力頂いた東武トップツアーズの伊藤蘭さんに感謝いたします。伊藤さんの御力がなければ今回の巡検は実現しなかったことをここに記します。

※本校に掲載した写真は、いずれも北海道札幌北高等学校の千田周二先生が撮影したものを提供していただきました。



割戸



坑道内の人形群



きっかわ店内に吊るされた塩引き鮭

祝 世界遺産登録 佐渡金山 —佐渡島と北前船— 北海道苫小牧南高等学校 藤 島 尚 子

1 はじめに

令和6年(2024年)8月4日(日)～7日(水)にかけて新潟港から佐渡島に渡り、佐渡金山をはじめ、史跡等を見学し研修を行った。現地で学んだことを簡単に記していきたい。

平成30年告示の学習指導要領には、地理歴史科を構成する空間軸と時間軸をそれぞれ学習の基軸とする「地理総合」と「歴史総合」をいずれも必修科目として位置付けるとともに、「探究」をその科目名に含む「地理探究」、「日本史探究」及び「世界史探究」を、生徒自身の興味・関心を踏まえて学ぶ選択科目として設置されている。このうち、「日本史探究」については、「歴史総合」を踏まえ、我が国の歴史の展開について、総合的な理解を深め、各時代の展開に関わる概念等を活用して多面的・多角的に考察し、歴史に見られる課題を把握し、地域や日本、世界の歴史の関わりを踏まえ、現代の日本の諸課題とその

展望を探究する力を養うことをねらいとして設置されている。特に、我が国に数多く存在する歴史を考察する上で有用かつ多様な資料を効果的に活用することが求められている。資料の効果的な活用は今後、授業を組み立てていく中でますます重要になっていくだろう。教師の真摯な授業研究が求められる。

この研修旅行で得られた史跡や資料について、何かの参考になれば嬉しく思います。



フェリーから新潟市を眺む。船の周りを人懐こいカモメが飛ぶ

2 新潟市歴史博物館 開館20周年記念企画展

—北前船と新潟—廻船と日本海海運の時代—

この企画展を旅の最初に見学することで、北前船が寄港した佐渡について、背骨が通ったように理解を深めることができる。筆者は都合により、初日の夜に新潟入りしたので、この企画展は旅の最後に個人的に見学することとなったが、佐渡島で見たものに一本の筋が通り腹落ちしたように思えた、良い振り返りとなった。

「北前船」にはいくつかの定義があるが、ここでは、「どこの船主の船か」という点よりも、「どの航路で活動していた船か」という視点で「北前船」を広い意味でとらえている。

1700年代から1800年代（江戸中期から明治初頭）にかけての豊富な海路図、中でも「佐渡全図」、日本海海運の船の展示、海運の荷物は佐渡市宿根木でも対面することとなる。

また、航海の無事を祈願した「船絵馬」や奉納絵馬は当時の人々の願いが伝わってくる。

企画展は、廻船問屋（新潟では、北前船という名称は使われず、「廻船」といわれた）の商品売買の記録資料や、とある船主一族の栄枯盛衰を紹介し、北前船の衰退で締めくくられている。博物館でもらったチラシに、「日本遺産「北前船」の文化財を巡る」学芸員の解説付きバスツアーの案内があった。博物館を飛び出し、新潟市内に残る北前船関連の神社の奉納絵馬や豪商の屋敷、ランチに海鮮丼といった内容で、町全体で、歴史を現場で学べる魅力的な企画だと思ふ。

3 黒木御所跡・順徳帝文学公園

承久の乱により佐渡に配流となり、この地で生涯を終えた順徳上皇の遺跡である黒木御所跡と、この地を訪れ順徳上皇に思いを馳せた文人たちが詠んだ歌や句の碑がある文学公園。地元の保存会が作成したガイドブックに歌碑・句碑等の解説があり、わかりやすい。この遺跡がある泉地区は佐渡島の真ん中に位置し、同じ地区には世阿弥配所もある。真野御陵（順徳天皇御火葬塚）も訪れた。火葬塚は御陵と同格扱いで宮内庁の管理である。



真野御陵 宮内庁管理の看板

4 佐渡金山

2024年第46回世界遺産委員会において「佐渡島の金山」がユネスコ世界文化遺産に登録が決定された。構成する金山、銀山はいくつかあるが、相川金山を訪れた。ここは、江戸初期から明治、平成元年の操業停止に至るまでの長い歴史を物語る数々の遺構が残っている。坑道跡、採掘施設、精錬施設などそのほとんどが国の重要文化財、史跡、近代化産業遺産に指定されている。江戸の採掘作業の様子を動く人形を使って展示したり、当時の坑道を実際に歩けたりと、体験を重視した展示が工夫されている。生で見ると「道遊の割戸」（江戸初期の露頭手掘り跡）の迫力には、金を求める執念が感じられる。夏の暑い外から坑道に入ると空気がひんやりとして寒いくらいであった。また、昭和28年まで佐渡鉱山の本部事務所として使用された相川郷土博物館も訪ねた。この建物は国指定史跡及び重要文化的景観に指定されており、明治時代の佐渡金山への西洋最新技術の導入による近代的な鉱山へと大きく様変わりする様子がわかる。日本の近代化を支えた佐渡の金山の重要性がわかる。



道遊の割戸



江戸初期の掘削の様子

5 宿根木の港町

佐渡金山が栄えた17世紀を経て、北前船（廻船）の寄港地として発展した小木海岸（佐渡島の左下の端）の入り江の集落である宿根



宿根木の町並



狭い路地が海へ延びる

木は、当時の集落形態が今日まで残っている。この宿根木集落の特徴は家屋の密集性にある。一つの村全体がいわば海運産業の基地として成り立ち、建物の建築にも船大工の技術が生かされ、狭い土地に合わせて家屋が建てられており、廻船による栄光と衰退の歴史を見ることができる。集落の至る所に案内看板があり、地元ボランティアによる案内が行われている。大正9年に建てられた小学校の木造校舎をそのまま利用した「佐渡国小木民族博物館」には、当時の千石船（北前船）の実物大復元船「白山丸」が展示されており、中に乗り込むこともできる。また、当時の廻船によって各地から運ばれてきた品々も収蔵され、一部が展示されているが、収集品が多いので、整理が追いつかないようだ。収集品の整理のボランティアなどをやってみたいと思わせる歴史の面白さがあった。



北前船に積まれていた品

6 城下町村上（新潟県村上市） 散策

佐渡島から本土に戻り、城下町村上上町屋エリアを散策した。JR村上駅の駅前であるが、「越後村上鮭塩引き街道」として、冬になると伝統文化である「塩引き鮭」が各家の軒下に吊るされる。村上の冬の風が鮭を干すにはちょうど良いそうだ。この塩引き鮭は、腹の一部をつないだままにする「止め腹」と呼ばれる独特の切り方をし、下げる際も頭を下にするという特徴があると、千年鮭「きっかわ」で説明を受けた。実際に店内奥で鮭を吊して干しており、香りや姿すべてが美味しそうな鮭であった。店を出て、黒塚の通りを抜け、寺が集まる寺町を散策し、城下町の佇まいを楽しんだ。



店奥に吊るされる鮭

7 おわりに

今回の旅の印象を記したが、この夏の暑さは尋常ではなかった。金山の坑道の涼しさは生き返るようだったが、江戸時代にここで働いた坑夫たちにとっては身体が冷えて辛かっただろうと思う。坑道では、現代アートの光と音によるプロジェクションマッピングによる空間演出が行われていたが、我々、歴史好きには大変不評であった。新しい演出を否定はしないが、「静かに歴史と対話したい」という気持ちである。この他にもトキの森公園や佐渡博物館も見学した。どこでも印象に残ったのは、地元の方が町と地域の歴史を大切に思いながら、町と文化を守り後世に伝えていく努力をされている姿である。その地で生活している方々の思いと努力があってこそ、歴史は繋がっていくのだと改めて思った。身近な素材を通して日本や世界の歴史に繋がるダイナミズムを生徒たちに伝えることができたらと思う。

今回の旅を企画された事務局の先生方にはご苦勞をおかけしました。一貫したテーマと構成力がある、よく練られたコース企画であり、大変勉強になりました。改めて深く感謝申し上げます。

巡検に参加して—北前船と新潟—

市立札幌開成中等教育学校 鈴木 綾

北前船の定義には、研究者によって細かく違いが見られるが、共通項として次の3点がある。1点目に、大坂と蝦夷地を日本海廻りで往復していたこと、2点目に寄港地で積荷を売り新たな仕入れもしていたこと、3点目に帆船であったことだ。

北前船の始まりは江戸時代に遡る。1700年代半ば過ぎに、松前に近い漁場でニシン漁の不振が深刻となり、この影響もあって近江商人の場所請負経営が振るわなくなった。この頃になると、近江国以外に本店を構える新たな他所商人が進出し、商人の新旧交代が進んだ。新しい商人は敦賀を窓口にした海運にこだわらず、松前城下などで商品を売り捌いた。そして、これに目をつけた北陸地方などの船主たちが、ここで商品を買取り、より高く売れる場所まで運んで売ることになった。この頃、大坂や瀬戸内では、綿花をはじめとした換金目的の作物である「商品作物」が盛んに生産されていた。この綿花栽培には、生産性を高めるため金肥が投入された。この金肥の代表的な物が、蝦夷地で獲られたニシンを加工したニシン漁肥であり、それには高い需要があった。その結果、現在の北海道から大坂までの航路を行き交いながら、商品をなるべく安く買い、別の場所まで運び、可能な限り高く売ることによって利益を生み出す「買積」という経営を行う廻船が、多く航海に乗り出した。これが「北前船」の始まりである。

「買積」は、ある場所で商品を仕入れ、それを別の場所まで運び、仕入れ時より高い値段で売ることによって利益を生み出す方法である。この方法は、時に大きな利益を上げる一方、大きな損失を被ることもあるハイリスク・ハイリターンな方法だった。これに対して、ある場所から別の場所へ品物を運ぶことで運賃収入を得る方法を「運賃積(賃積)」と言う。この方法は、買積と比べると安定的な収入が見込める方法だったため、北前船の中には買積と運賃積を組み合わせて航海している船もあったが、主要な経営方法は買積であった。

今回の巡検で訪れた新潟市歴史博物館の企画展「北前船と新潟」では、明治期の新潟町問屋の引札が展示されていた。引札は現在の広告印刷物・チラシに相当する物であり、基本的には宣伝した店の名(屋号)、業種、所在地などの文字情報と目を惹きつける図柄で構成されている。図柄は恵比寿、大黒天、美人、鯛などのめでたいものや、文明開化を象徴する新しい文物、あるいは店の所在地に関する風景などがある。「慶賀新年」の文字や「曆」が刷られ(写真1)、新年の挨拶状に同封される場合もある。新潟県の廻船問屋の引札は港の様子が分かる図柄を採用したものが多く、その特徴を示す灯台、船見櫓、新潟税関などの施設が描かれていた。写真2は和洋船具工業用品商の引札であり、廻船問屋の引札ではないが、その中に廻船と富士山の図、電話・振替貯金の番号が掲載されている。また、写真3の引札のように船を安全に入港させるために水戸口の水深や気象について知らせる「水戸浅深信号」「警戒信号」などを掲載しているものが多い点も特徴である。

このような北前船の最盛期は明治以降であった。それは、江戸時代では松前藩が松前・江差・函館しか廻船の入港を認めていなかったが、明治3年からどの港でも交易ができるようになったからだ。例えば、新潟町の北前船主の一人に初代小澤七三郎がいる。新潟町の小澤家は、元々江戸時代初期に加賀国細坪村(現・石川県加賀市)から長潟(現・新潟市中央区)に移ってきた家の分家である。新潟町には遅くとも1800年代初期に住み、代々「在宿

(近郷百姓の米穀売買の仲介などを行う)を営んでいた(写真4)。文政13年(1830年)に新潟町で発生した民衆騒擾の際、同家も打壊に遭っており、この頃にはすでにある程度の財力を持っていたようだ。その後、明治6年(1873年)に当主の七三郎が石崎弥平(弥兵衛)という人と廻船(北前船)「長久丸」の共同経営を始めた。さらに七三郎は、「観徳丸」という船を購入して、翌7年に廻船の単独経営に乗り出した。続く8年には「幸運丸」という船を追加購入し、2艘体制で廻船経営に臨んだ。このように、小澤家は廻船経営を段階的に展開していった。川村(2019)によると、小澤家の北前船ビジネスは、基本的に新潟で積み込んだ越後米を北海道に運び、小樽その他の湊で運んできた米を販売するものであった。北海道で得た売上金を元手にアワビや鮭の各種加工品を購入し、それを積んで瀬戸内・大阪方面へと登る。そこで北海道で仕入れた海産物、とりわけアワビ粕等を販売する。大阪から新潟へ戻る途上で、大阪・下関・三田尻等で帰り荷として木綿、塩、油、砂糖等を仕入れ、それらを積み込んで新潟、酒田、土崎あるいは北海道へと北上してそれらを販売した。こうしたビジネスを小澤家は最盛時には観徳丸・幸運丸2艘のみの和帆船で行った。小澤家の経営状況を示した「年々調控帳」によれば、同家の廻船経営は明治9年から11年頃がピークであった。しかしその後、廻船経営の割合は後退し、撤退していったとみられる。

今回の巡検で、旧小澤家住宅を訪れた(写真5)。旧小澤家住宅は、かつての新潟町における町家の典型例であり、かつ、明治時代に成長した豪商の屋敷構えを構成する一連の施設がほぼそのまま残されている。上大川前通に面する敷地(約1,600㎡)の中に、主屋や土蔵などの建物がある。主屋は、通りに面する平入の店に妻屋の棟が接続する形態となっており、せがいで造り・張り出し二階といった新潟の町家らしい姿を保つ。さらに、旧小澤家住宅は、明治時代の中頃から終わりにかけて敷地を北側に拡大して、明治42年(1909年)に竣工した家財蔵をはじめ、新座敷・離座敷などの増築や庭園造りを行った(写真6)。これらの建物と庭園が一体となって、明治時代の豪商の屋敷構えを構成しており、旧齋藤家別邸(旧齋藤氏別邸庭園)と併せて、かつて海運業に手を染めて豊かとなった両家の繁栄を伝える文化財として、今も多くの観覧者を集めている。

今回の巡検で、江戸・明治期に現在の北海道-大阪間の海路において、港から港へ、商品を売買しながら航海した北前船の歴史に触れ、今に息づく歴史を感じることができた。

※写真は、いずれも著者が巡検中に撮影したもの

参考文献

廣野耕造(2018)みなとまち新潟の歴史と文化,石油技術協会誌, No.83(4),251-256

川村晃正(2019)明治初年新潟小澤家の北前船ビジネスの一齣,専修大学社会科学研究所 月報, No.667.668,119-139

北前船公式サイト,ガイドブック北前船 49<https://www.kitamaebune.com/download/>(最終閲覧日 2024.11.8)

日本遺産ポータルサイト

<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story039/>(最終閲覧日 2024.11.8)

写真4



写真1



写真2



写真3



写真5



写真6



「北前船」を各資料から考察してみる

北海道岩見沢東高等学校 泉 宏 和

今年度、夏の研究会で菅原慶郎先生の「北方産品と『北前船』」の講演を拝聴し、また新潟・佐渡巡検においても北前船関連の展示や史跡を観る機会があった。それを歴史総合・日本史探究でどのように生かすことができるだろうかと考え、ジグソー法をベースにした1つの試案を示してみる。

1 共通プリント（北前船とは？）

山川出版社の『詳説日本史探究』・『日本史用語集』における「北前船」の記載は以下のとおりである。

「18世紀末頃から、日本海の北前船や尾張の内海船など、遠隔地を結ぶ廻船が各地で発達した」（『詳説日本史探究』P184）

「江戸中期～明治前期、北海道や東北の物資を、松前（北海道南西部）や日本海各地に寄港し、下関を廻って大坂などに輸送した船のこと」（『日本史用語集』P175）

なお、「北前」の語源として有力な説は、「上方や瀬戸内からみて北の方にあたる日本海海域を指す語」というものであり、当時の人々が「北前船」と呼んでいた記録はほとんどない。呼び名の多くは廻船であり、船の形状は弁財船である（参考文献1、資料1・2）

【資料1】北前船（復元された千石船「白山丸」（佐渡国小市民俗博物館）、白山丸まつりのポスター）



【資料2】北前船（1/20 船舶模型（船の科学館HP））

「北前船 KITAMAE 公式サイト」（参考文献3）によると、北前船を以下の3点で定義づけ・整理している。

- ①江戸時代中期（18世紀中ごろ）～明治30年代
- ②大阪と北海道を、日本海回りで
- ③商品を売り買いしながら結んでいた商船群

受験知識としては、「大坂→江戸間の南海路に就航した菱垣廻船・樽廻船に対し、日本海を結ぶ西廻り海運を活用した北前船」という比較で済むところだが、上記①～③について資料をもとに考察させてみようと思う。

【資料1解説】「弁財船」という帆走専用船。帆の綿布は柔道着のような厚く硬く織られた布地。漕手が不要で積載量の割に少人数での航行が可能。積載量確保のために胴幅が広い形状をしている。

2 プリントA（北前船はどこに寄港し、どのようなものを運んでいたのか？）

北前船の定義①～③をもとに、資料3より、「蝦夷地～大坂間の日本海・瀬戸内の各地に寄港していること」、資料4～7より「蝦夷地の産品を大坂・長崎へ運ぶだけでなく、寄港地の特産品などを売り買いしながら航行していること」をつかませたい。

【資料6解説】笏谷石は、越前（福井県）で産出される石。北前船交易で蝦夷地に向かう際にバラストとして積み、蝦夷地

【資料3】北前船の主な寄港地〔地図〕（参考文献2）

【資料4】幕末期新潟町の移出入品〔地図〕（参考文献2）

【資料5】江戸期の各地特産品（日本史図録）

【資料6】姥神大神宮（江差町）参道の笏谷石〔写真〕

【資料7】18世紀後半の長崎俵物・コンブ運搬用お雇船概要〔表〕（参考文献4）

でニシンなどと引き換えた。

3 プリントB（北前船が繁栄した理由は何だろうか？）

北前船が最も活躍したのは、江戸時代ではなく明治になってからである。松前藩の三湊（松前・江差・函館）に限定されていた入港が明治3年に廃止されると、北海道各地の港へ直接船が入るようになった。

定義③をもとに、資料8・11より、「買積という経営方法のメリット・デメリット」を考える。資料9・10からは「ニシンやコンブがなぜ大量の需要があったのか」を考察する。

【資料8】菱垣廻船・樽廻船と北前船の経営方法の違い〔表〕（年間数往復と基本1往復、運賃積と買積、明治初期には衰退・明治初期に全盛期）

【資料9】江差の五月は江戸にもない（「江差屏風」北海道立函館美術館所蔵）

【資料10】コンブ生産量（参考文献4）

【資料11】相場書（参考資料2）

【資料11解説】米穀商から廻船経営に参入した（明治6年～10年代半ば）小澤七三郎へ全国各地の得意先商人からもたらされた相場書が、新潟市文書館所蔵の小澤家文書に残されている。商品の地域間価格差を利用して利益を生み出すために、商品価格を示す相場情報は重要なものであった。

4 プリントC（北前船は明治後半になるとどうして衰退してしまったのだろうか？）

定義①をもとに、資料12・13より、「近代化によって新たに登場した交通通信手段」を見出す。また、資料14より「交通（鉄道・汽船）の発達で、北海道からの東京・大阪への商品輸送をどのように変えたのか」を考察する。

【資料12】廻船問屋の引札（参考文献2）

【資料13】電報文の控え（参考文献2）

【資料14】日本の産業革命（日本史図録）

【資料12解説】資料12には、電話・電信柱・汽車が描かれている。当初電報は各地の相場情報を瞬時に伝えることができ、廻船経営に利益をもたらしたが、交通通信の発達・普及により大量輸送が実現して全国の商品価格が均一化されていくと買積経営によるメリットは失われていった。

5 まとめプリント（プリントA～Cの資料や追加資料をもとに、北前船が日本の歴史に果たした役割は何か、述べてみよう）

定義①→西廻り海運の整備を契機に興り、明治初期に最盛期を迎えたが、近代化（交通の発達）により役割を終えた。

定義②→蝦夷地の海産物を大坂・長崎へ輸送するだけでなく、日本海・瀬戸内の各地に寄港していた。

定義③→買積・地域間価格差の利用という経営手法により、ハイリターンのある交易船であった。寄港地各地の商品が積み込まれ、遠隔地にもたらされた。

上記を踏まえ、「近世～近代初期にかけて、寄港地間の経済活動を活性化させ、商品・文化の流通・伝播に大きな役割を果たしたこと」が述べられていればよいのではないだろうか。

【資料15】北前船が運んだ文化（ニシン蕎麦・民謡・人形）（参考文献2・3）

6 おわりに

様々な関連資料がある中から、意図して選択した一部の資料から考察させることで、結果として北前船のある一面しか

理解できないものとなっているかもしれない。また、著作権の関係で資料のほとんどを題のみでしか示せなかった。実際の授業で展開できるイメージがつかないものとなってしまっていることは反省点であるが、教科書に述べられているわずかな文章が、これらの資料を土台に確かな事実として記載されていることが感じられれば、この探究活動としては十分かなと考える次第である。

参考文献

- 1 牧野隆信『北前船の研究』法政大学出版局、1989年。
- 2 新潟市歴史博物館編集・発行『北前船と新潟一廻船と日本海海運の時代―』、2024年。
- 3 北前船 KITAMAE 公式サイト【日本遺産・観光案内】(kitamae-bune.com)
- 4 菅原慶郎「北方産品と『北前船』」、第47回北海道高等学校日本史教育研究大会レジュメ、2024年。

新潟・佐渡巡検レポート「新潟市歴史博物館」(みなとぴあ)

札幌日本大学高等学校 見山 智 宣

◎施設概要

標題の施設は、幕末の開港5港のうち、開港当時の姿のまま唯一現存する国指定重要文化財「旧新潟税関庁舎」を中心に、その周辺を一体的に整備して2004年に開館しました。博物館本館は2代目新潟市役所庁舎のデザインを用いているそうです。現在の建物は鉄骨鉄筋コンクリート造3階建てです。展示部分としては、主に企画展示室中心の1階と常設展示室中心の2階がありました。本レポートでは、前者で実施していた企画展の展示品をもとにした授業構想について紹介します。新潟市歴史博物館2024年夏企画展「北前船と新潟」は以下の4テーマで構成されていました。

- 1 「北前船の登場」
- 2 「新潟町と廻船」
- 3 「廻船問屋と船主」
- 4 「海運の荷品」



◎授業構想

上記企画展の資料をもとに知識構成型ジグソー法を用いた授業を構築する(以下の基本的な構成は〔武井2024〕を参照しています)。

○全体の問い「北前船はどのような活動をしていたのか？」

- ①♣「北前船はどのような品物を取引していたか？」
- ②♥「北前船はどのように運営されていたか？」
- ③♠「なぜ近代になるにつれ、北前船は運営できなくなっていったのか？」

〔メイン課題〕

北前船は北海道と本州をつなぎ、どのような活動をしていたのか？また、それはいつ頃のことだったのか？

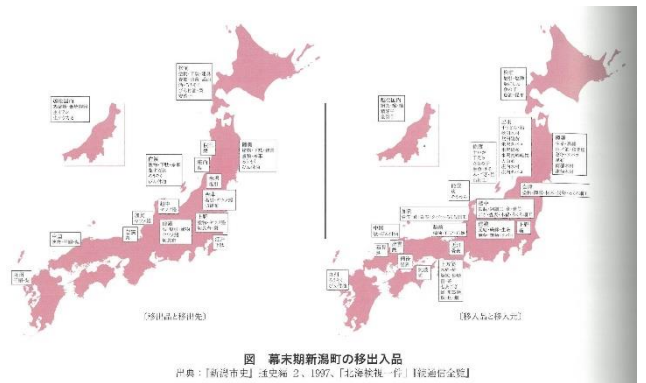
〔授業の目標〕

北前船の活動実態をいくつかの資料の読み解きと話し合いをもとにして、北海道(蝦夷地)と本州の交通、流通や市場のあり方について、立体的に捉えることができるようになる。

<p>♣どんな品物を取引？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米や酒、塗物・下駄・畳などを新潟から松前へ移出 ・塩引・塩鱒・昆布などを松前から新潟へ移入 	<p>♥どのように運営？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・船頭が寄港地で商品を取引して利益を上げる。 ・各地の市場価格の差を利用して 	<p>♠なぜ衰退したのか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・電報などの通信技術や鉄道などの交通網の発達で地域ごとの価格差がなくなる。
<p>〔学びの予測〕 エキスパート活動 ①資料から、北前船の取引・運営・衰退に関する情報をそれぞれ読み取っている。 ジグソー活動 ②既有知識である、江戸時代の航路(西回り航路)や流通に関する知識を、エキスパート資料で学んだ知識と組み合わせている。 ③北前船の取引・運営・衰退に関する情報を組み合わせながら、近世江戸期から近代明治期にかけての流通と市場に関する概念理解を構築している。</p>		
<p>〔仮のゴール〕 北前船が買積方式で取引を行い、西回り航路の各地域の経済活動を支えていたことや北海道が他の地域に物資を供給したり、提供されたりするのに重要な役割を果たしていた。最終的には、電報などの通信技術や鉄道などの交通網発達によって各地域の価格差がなくなっていったことなどによって、北前船は廃れていった。</p>		
<p>〔科目、単元での位置づけ〕 「日本史探究」での大項目C「近世の日本と世界」で実施。江戸時代の交通や流通、市場の発達の一側面としてとりあげる。「歴史総合」の大項目B「近代化と私たち」で扱うことも可能かもしれない。</p>		

○資料に対する着眼点(資料は〔新潟市歴史博物館2024〕を参照)

- ♣ - 1 新潟からの〔移出品と移出先〕、〔移入品と移入元〕に着目し、北海道(蝦夷地)とどのような品物を取引していたかを生徒が読み取る。



- ♣ - 2 焼酎徳利とその説明から(新潟の米によって作られた)焼酎が北海道に移出されていたことを生徒が読み取る。

4-14 焼酎徳利

明治期 公益財団法人鶴友会所蔵

主に北海道へ向けに送られた焼酎用の徳利。西蒲区の松郷屋などにおいて明治10年代から20年代にかけて盛んに作られた。中身の消費後も容器などとして再利用されたといわれ、北海道には同様の徳利が多数残されている。しかしガラス瓶の普及によって次第に使われなくなった。なお「新潟新聞」大正7年(1918)11月24日に掲載された新潟市の酒屋・赤阪長八の回顧談によると「新潟から北海道へは随分酒を出していたもので二十軒の酒造家はみな北海道を主とし北海道と新潟だけで品を売り捌いていたのである」とある。



4-15 素焼きの焼酎徳利

明治期 公益財団法人鶴友会所蔵

素焼き状態の松郷屋焼の焼酎徳利。齋藤喜十郎家を示す屋号「ヤ三」が刻印されている。同家製造の焼酎を詰める予定だったものであろうか。



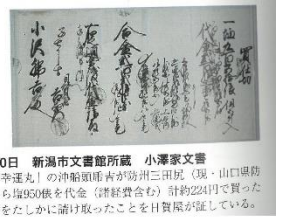
「ヤ三」の部分

♥ - 1 差引帳や損益計算表をもとにした図をもとに、北前船は各地で商品売買を行い、利益を出そうとしていたことを生徒が読み取る。

♥ - 2 仕切入袋や買仕切という史料をもとに、船頭が各地で取引を行い、その成果を船主に報告する(船主が活動をチェックする)しくみになっていたことを生徒が読み取る。



3-25 神丸仕切入袋 慶應2年(1866)1月 当館所蔵 小池上家文書 小池屋(小道上)所持画船「神丸」の仕切帳が複数取められていたと考えられる袋。仕切帳は商品売買のあたり品物名や数量及び、代金の他、別途かかる諸経費などを記した書類。



3-26 買仕切 明治9年(1876)7月10日 新潟市文書館所蔵 小澤家文書 初代小澤七三郎所持画船「李運丸」の沖船頭晴吉が坊州三田尻(現・山口県防府市)の日賀屋吉右衛門から塩950俵を代金(諸経費含む)計約224円で買った時の仕切帳。晴吉から代金をたしかに掛け取ったことを日賀屋が証している。

♠ - 1 各地から報告される商品の相場を控えてあることから、北前船を運営する人たちは各地の商品価格の変動に強い関心をもっていたことを生徒が読み取る。

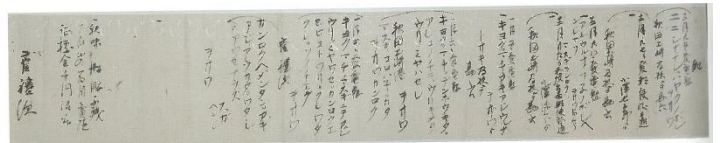


3-47 相庭 3月19日 明治10年(1877)か 新潟市文書館所蔵 小澤家文書 羽後酒口港の磯船問屋・藤原伝之丞から小澤家にもたらされた相場書。



3-48 相場 明治10年(1877)4月19日 新潟市文書館所蔵 小澤家文書 兵庫港の徳谷八兵衛から小澤家にもたらされた相場書。同封された書状には「当港米穀気勢(※相場)之衰、陸軍事件(※西南戦争)之始より五、六拾銭方高下致し」と西南戦争の影響で米価が大きく変動したことが書かれている。

♠ - 2 電報文控えから、船主が各地の商品価格を知った上で、電報を使い、現地の船頭に細かい指示を出すようになったことを生徒が読み取る。



3-52 電報文控え 明治11年(1878)12月25日~明治12年(1879)1月6日 新潟市文書館所蔵 小澤家文書 小澤七三郎、源三郎と秋田十崎港の岡村五郎八のもとに滞在していた幸運丸船頭の勘六との間でやりとりされた電報を時系列にまとめて控えたもの。「アシ(秋株=株のこと)売るな、船倉使、返事まつ」など運商社にあっても船主が商品取引に直接関与していた様子が看取できる。

※♠の追加資料として、明治の終わり頃までで全国に鉄道網が広まった図を資料として提示し、生徒は近代になって大量の物資を各地に運ぶことができるようになったということを読み取る。

※この図版では活字への翻刻が施されていないので、実際に生徒で授業実践する際には使用教材に対してもう少し解説を付す必要がある。

○授業の流れ

- ①自分の意見・予想を記述する(2分)

メイン課題に対して、まずは1人で自分の考えを書いておく。
- ②エキスパート活動(8分)

生徒は3人1組の小グループにわかれて、エキスパート資料の1つをもとに考察する。
- ③ジグソー活動(15分)

別々の資料をもつ3人1組の小グループをつくり、おのおのの資料から得た知識を相互に活用しながら、対話的に理解を深める。
- ④クロストーク(10分)

ジグソー活動での考察を報告しあうことで、腑に落ちる表現や新たな視点に出会い、聞き手が理解を深める。
- ⑤最後に自分の考察を記述する(5分)

再びメイン課題に対して、1人で記述する。

◎参考資料

・武井寛太編『歴史総合・日本史探究・世界史探究の授業を实践するためのヒント』(山川出版社、2024年)

3-36 観得(徳)丸差引帳

明治9年(1876)11月 新潟市文書館所蔵 小澤家文書

初代小澤七三郎所持船「観得丸」は船頭「亭右衛門の弟「船手三役人」(いわゆる「船方三役」)と呼ばれる幹部)と、一般の求主と考えられる「船手七人組」の計11人が乗船し、冬2回程度の航海を行っていた。本史料は明治9年の2回目(7月25日に新潟町を呂根)の航海における商品取引、諸経費をまとめた船頭亭右衛門から船主七三郎への報告書である。この航海で同船は約12万の赤字を出した。

表 観得丸の明治9年2回目航海(下図③以降)の損益計算書

費用	金額	収益	金額
船後米1,500俵ほか仕入	3,310円91銭7厘3毛	船後米ほか売上	3,411円81銭7厘
数の子137本、鯉柏624本ほか仕入	2,140円28銭4厘3毛	数の子、鯉柏ほか売上	2,155円70銭4厘4毛
乗組員の給料、食費、船材、諸経費	128円29銭7厘6毛	損失	111円97銭8厘
合計	5,579円49銭9厘4毛	合計	5,579円49銭9厘4毛



(表紙)

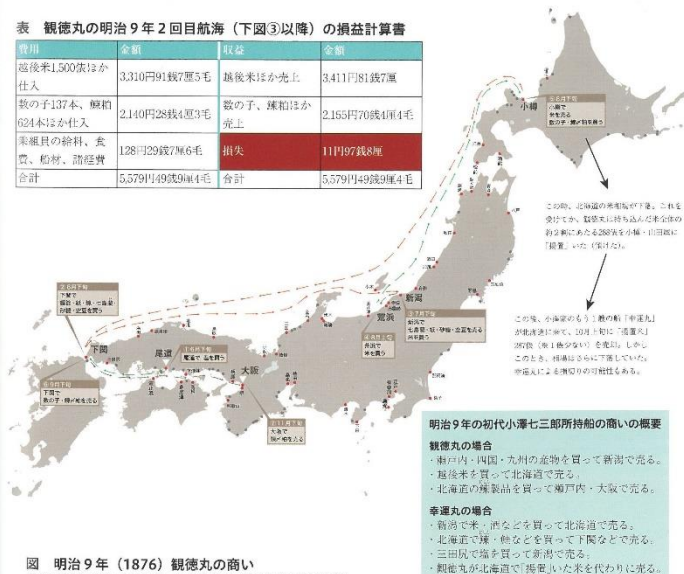


図 明治9年(1876)観得丸の航い

出典:『観得(徳)丸差引帳』他小澤家文書(新潟市文書館所蔵)

新潟市「北前船の時代館 新潟市文化財 小澤家住宅ガイドブック」2011
川村晃正「明治初年新潟小澤家の北前船ビジネスの一瞥」『専修大学社会科学研究所月報』667・668号2019

- ・新潟市歴史博物館みなとびあウェブサイト
<https://www.nchm.jp/>
- ・『新潟市歴史博物館 開館20周年記念企画展 北前船と新潟－廻船と日本海海運の時代－』図録 (2024年)
- ・新潟市ウェブサイト
<https://www.city.niigata.lg.jp/chuo/shisetsu/yoka/bunka/minatopia.html>

「鮭」と越後、千年の歴史

北海道恵庭南高等学校 國 岡 健

越後(新潟県)は、古代より現代に至るまで一貫して「鮭」との歴史を紡いできた地域である。特に、今回の巡検で訪れた村上市は、現在でも鮭食文化の町として、創意工夫に満ちた鮭料理を出す店が数多くあり、見学した「きっかわ」店内の天井に所狭しと吊るされていた塩引き鮭は圧巻であった。お店の方から受けた、飢饉の際に鮭に救われた村上の歴史、塩引き鮭の完成までの作業工程などの説明からは、この地域に暮らしてきた人々の鮭への思いを強く感じた。以下、見聞をふまえて、【教材化の視点】に合わせて概略的に、越後と鮭の関りについて述べてみたい。

古代

【教材化の視点】律令税制、諸国の税目品

越後は、税目の調・庸として鮭が規定されていた。諸国の中で鮭が調・庸とされていたのは、越後だけであった。『宇治拾遺物語』に、「これは今は昔、越後国より鮭を馬におうせて、二十駄ばかり、粟田口より京へ追い入れけり」とある。運脚により平安京に運ばれる鮭の姿が想像できる史料である。

中男作物には、鮭内子(こごもり・腹に卵をもっている鮭)、鮭子(すじこ・サケの卵を塩漬けにしたもの)、氷頭(ひず・サケの頭部軟骨を干したもの)、背腸(せわた・背骨についている血の塩辛)、諸国貢進御費として鮭楚割(さけすわやり・サケの内臓を取り除いて干したもの)、鮭子(すじこ・サケの卵を塩漬けにしたもの)、氷頭、背腸がそれぞれ指定されており、鮭は貢進物として重要な役割を担っていたことがわかる。

中世

【教材化の視点】食封、荘園公領制、国司と荘園領主

1048年(永承3年)7月5日に、越後の国雑掌である秦成安が、食封物としての鮭3,278隻余を、食封主である東大寺に送付したとの記録がある。1112年(天永3年)には、越後国から調の鮭が不漁のため、代わりの物で弁済したいと申請された。1165年(永萬元年)に国司から出された文書では、公領の三面川で漁獲される鮭は、越後国の重要な貢納物であるから、これ以降荘園領主側はそれを妨げてはならないと述べられている。このように越後の鮭は、国家、食封主、荘園領主ら納入・貢納される側から、調として重要な産物の一つと認識されていたことがわかる。

近世・江戸時代

【教材化の視点】藩の殖産興業、藩財政

村上藩では1619年(元和5年)に、「御料分所々の川にて、鮭の子を取り申す儀、かたき法度に候」(村上藩家老堀主膳の制札)と、鮭の保護政策を行った。1721年(享保6年)にも、藩直轄の漁場に対して、鮭の資源保護のために一切の漁獲を禁じる命令を出している。1795年(寛政7年)には、藩内の三面川に対して、「鮭の子をすくい捕り候者これある段あい聞え、不埒のいたり候、(中略)子供の仕業に候とも御ただしの上、親の越度に仰せつけらるべく候、かつまた産みつけ候はらこを取り候儀、かたくしまじく候」としており、藩の主要産品として、鮭資源の枯渇を回避するため、詳細な実例をもとに厳しい対策を取っている。

藩は鮭漁を対象に税も課した。当初は役米であったが、1649年(慶安2年)には役金に、1689年(元禄2年)頃には運上金に変更された。運上金制度は、藩が直轄する三面川の漁場をいくつか分割し、漁場ごとに入札させて落札者を決定した上で、落札金額を藩に納入させることで藩の財政を確保する仕組みを構築した。この運上金制度を安定的に維持するためには、鮭の漁獲量を確保する必要があった。そこで考え出されたのが栽培漁業的手法

である。稚魚を保護して産卵魚を確保するとともに、産卵しやすい環境を整えるために産卵適地流域を選定した。次にその流域の上流を簾止めして遡上を阻止すると同時に、下流を締め切りその範囲内で産卵させた。そして下流の簾を開放し産卵し終わった鮭を引き揚げ、別の鮭を入れ込み産卵させるという方法をとった。鮭を適流域に囲い込んで産卵させ、産卵後の鮭を漁獲し、次に別の鮭を入れ込み産卵して漁獲、これを繰り返すという手法である。これは下級藩士青砥武平治が考案した「種川の法」と呼ばれた。鮭の回帰性に着目した画期的な方法であった。これにより寛政年間には漁獲高が急増し、藩への運上金が大幅に増え、鮭は村上藩最大の産物となり藩財政に大きく寄与した。1864年(文久4年)に出された「越後土産初編 産物見立取組」(『越後土産初編 紀興之編』新潟市歴史博物館所蔵)には、村上鮭として記載されている。

近代・明治時代

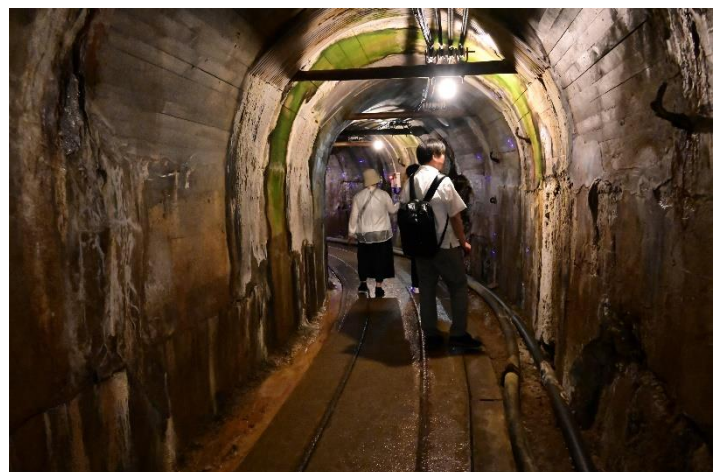
【教材化の視点】土族授産・勸業勸農政策

1883年(明治16年)、明治政府の調査で、「村上土族は、三面川の鮭漁によって、生計を支えている」と言われた。その実態はどうであったのか。鮭漁の中心であった三面川は、藩が廃止されたからは国が領有し、地元の町が管理し民間人が漁業権を持っていた。収入源を失った土族は、この三面川に目をつけて漁業権と水面管理権を法外な価格で強引に取得した。1878年(明治11年)に土族らはより多くの増収を見込んで、内務省の勸農局からアメリカの技術を採り入れ日本初の人工孵化を実施した。その結果、江戸後期以来行われていた「種川の法」にくらべて、明治13年には漁獲数14万尾余、売上高5万9千円に、17年にはそれぞれ73万尾余、22万1千円へと飛躍的な成功を収めた。こうした中、土族による共同経営の「村上鮭産育養所」が設立された。その収益金は地元の警察署や郡役所の建設費に使われ、また土族子弟の教育助成金にも充てられ、そうした子弟は「鮭の子」とも呼ばれた。

越後の鮭の例に見られるように、諸国、諸地域において伝統的に受け継がれてきた産物という、モノ、を通して通史的に地域の歴史像を描くことの可能性にあらためて気づかされた。巡検には、実際に足を運び、そこで得られた見聞に触発され授業実践へと私たちが誘ってくれる魅力がある。

参考文献

- ・『新潟県史 通史編1 原始・古代』1986年
- ・塚本浩巳「国雑掌の職掌と地位：東大寺封物進上を中心に」(『法政史学』第65号、2006年)
- ・大場喜代司『シリーズ藩物語 村上藩』現代書館、2008年
- ・『きっかわ』パンフレット冊子
- ・越後村上うおやHP <https://www.uoya.co.jp/index.html>
- ・マルハニチロ HP サーモンミュージアム
<https://www.maruha-nichiro.co.jp/salmon/>
- ※『村上市史』には、さらに多くの記述がなされているものと思われる。今回は『村上市史』を参照する機会を得られなかった。



「私たち」が探究すべき「歴史像の伝え方」 ～佐渡金山の世界文化遺産登録を手がかりに 札幌大谷大学非常勤講師 浦生 崇之 (前市立札幌旭丘高等学校副校長)

1 はじめに

「歴史総合」と「日本史探究」「世界史探究」の科目に再編された高等学校の歴史教育。目下多くの現場で、授業研究が重ねられているものと推察する。

現行の学習指導要領解説編から、改めて、「歴史総合」の大項目と中項目の配置を取り出してみると、下の表のようになっている¹。この大項目に着目した小川幸司²は、永原陽子・成田龍一との対談の中で、

「歴史総合」の大項目には、それぞれ「B.近代化と私たち」「C.国際秩序の変化や大衆化と私たち」「D.グローバル化と私たち」というタイトルがたてられています。この場合の「私たち」を多層的なものと捉え、「私たち」の範囲を小さくしたり大きくしたりすることで、歴史の描き方はどのように変わってくるだろうかということ、私は是非、教室で探究したいと考えています。実は「私たち」の中にも多様な人々がいて、その多様なありようを踏まえて歴史を見つめているだろうかということ問い直していきたいのです。

と述べている（下線は引用者）。

大項目		中項目
A	歴史の扉	(1) 歴史と私たち (2) 歴史の特質と資料
B	近代化と私たち	(1) 近代化への問い (2) 結びつく世界と日本の課題 (3) 国民国家と明治維新 (4) 近代化と現代的な諸課題
C	国際秩序の変化や大衆化と私たち	(1) 国際秩序の変化や大衆化への問い (2) 第一次世界大戦と大衆社会 (3) 経済危機と第二次世界大戦 (4) 国際秩序の変化や大衆化と現代的な諸課題
D	グローバル化と私たち	(1) グローバル化への問い (2) 冷戦と世界経済 (3) 世界秩序の変容と日本 (4) 現代的な諸課題の形成と展望

本稿では、2024年度の北海道高等学校日本史研究会の巡見の報告によせて、引用した小川氏の慧眼に敬意を表しつつ、佐渡金山の世界文化遺産登録を題材に、私見を記すことにしたい。

ちなみに、前回の北海道高等学校日本史研究会の巡見は、2012年の対馬・壱岐をめぐる旅であった。この時には、中世史家の村井章介氏が、境界地域における多義性について論考を発表され、研究会でも講演をしていただいたことで、自分も含めた会員がさらに刺激を受け、実現したものであった。北海道という地域性を、授業の教材にどのように反映させるか、という課題意識（というほど大袈裟ではないが、時々研究会の実践で顔を覗かせてきたもの）に基づいた時、表現こそ異なるが、村井氏の「境界における多義性」と、小川氏の『「私たち」の範囲を小さくしたり大きくしたりする』という発想は、共通していると、自分には映る。そのことが、近代社会に「外地」と位置付けられた北海道とグローバルヒストリーを結びつける結節点となる可能性を感じるからこそ、あえて境界地域を巡ってきたのだと、今回の巡見を自分なりに振り返って、改めて感じていることを付記しておく。

2 佐渡金山の世界文化遺産登録にまつわるユネスコの委員会における日本政府のコメント

2024年7月、日本政府が推薦していた佐渡金山の世界文化遺産登録が正式に承認された。この登録審査を行うユネスコ世界

遺産登録委員会において、日本政府は、次に引用する声明を発表している³（下線部は引用者）。

（前略）「佐渡島の金山」は、世界の他の地域において機械化が進んだ19世紀半ばまでの間に、高度な手工業による採掘と製錬技術を継続したアジアにおける他に類を見ない事例であり、顕著な普遍的価値を有するものとして世界遺産として登録されたことを光栄に思う。イコモスから示された3つの勧告については、日本政府としてこれら全てに対し、対応を完全に完了した。

日本は、世界遺産委員会決議の勧告 e) に関し、朝鮮半島出身労働者を含め、「佐渡島の金山」の全体の歴史を包括的に扱う説明・展示戦略及び施設を策定すべく、韓国と緊密に対話してきた。

日本は、全ての世界遺産委員会関連決議及び同決議に関連する自らのコミットメントに留意し、また、「佐渡島の金山」における全ての労働者、特に朝鮮半島出身労働者を誠実に記憶に留めつつ、決議の勧告を忠実かつ完全に履行し、韓国と緊密に協議しながら「佐渡島の金山」の全体の歴史を包括的に扱う説明・展示戦略及び施設を強化すべく引き続き努力していく。

日本は、そのようなコミットメント及び「佐渡島の金山」に関する韓国との見解の相違を友好的に解決する意欲を示すことを目的として、全ての労働者の過酷な労働環境を説明し、その労苦を記憶に留めるため、現地の説明・展示施設において、全ての労働者に関する新たな展示物を既に展示した。

「佐渡島の金山」における全ての労働者のための追悼行事も、毎年、現地において執り行われる予定である。

この機会に、佐渡の現地施設において展示されている要素の一部を簡潔に紹介したい：

一戦時中、国家総動員法、国民徴用令及び他の関連措置が朝鮮半島にも導入された。初めに「募集」が、次に「官斡旋」が、日本が設置した朝鮮半島における行政機関である朝鮮総督府の関与の下実施された。1944年9月以降は、「徴用」が労働者に業務を義務付け、違反に対しては懲役又は罰金が科された。一

また、展示部屋には、朝鮮半島出身の労働者は、削岩、支柱、運搬といった危険な坑内作業に従事する者の割合が高かったことを示すデータもある。さらに、労働条件をめぐって行われた労働争議に関する記録、食糧不足に関する記録、死亡事故に関する記録も残されている。朝鮮半島出身者について、ある1か月の平均稼働日数は28日であったことを示す記録があるほか、朝鮮半島出身労働者の中には逃走したり収監されたりした者がいたことを示す記録もある。（後略）

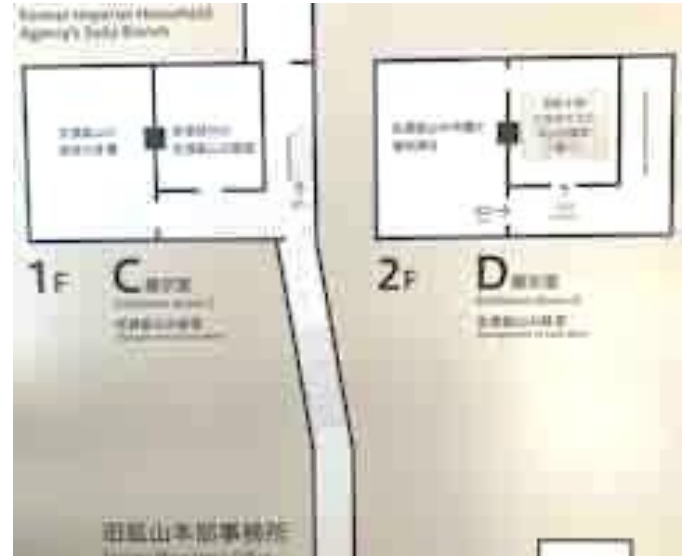
引用が長くなったが、下線Aが示すように、日本政府の立場は、「佐渡島の金山」を世界遺産に登録するにあたり、朝鮮人労働者がどのような扱いを受けたのかについて、韓国との間の見解の相違を埋めるべく、真摯に対話を重ね、展示物の構成について見直しを図ってきた、ということであろう。

少なくとも、国内において、2017年に、東京都の小池知事が関東大震災で犠牲になった朝鮮人に対する追悼行事にあたり歴代都知事が追悼文を送付してきた慣例を取りやめ（小池知事は「犠牲となったすべての方々に哀悼の意を表しており、個々の行事への送付は控える」⁴と説明）、これに関連して、国会で朝鮮半島出身者に対する虐殺の存在について見解を求められた政府が、「その事実を示す『政府内』の『記録』が見当たらない」と木で鼻をくくるような回答をしたこと⁵と比較してみると、今回の「佐渡島の金山」の登録に際して、政府が朝鮮半島出身の労働者に関するデータの存在を認め、その実態の一部に言及したことは、日韓両国の信頼関係構築に貢献するものと評価されたことは間違いない。

ちょうど今回の巡見出発の直前に、「佐渡島の金山」が世界遺産に登録され、さらに日本政府の過去の植民地支配に関する姿

勢の変化の兆しがあった、というニュースが伴っていたことから、下線ウに示された内容が、実際にどのように展示内容に反映しているのか、期待は大いに高まったのであった。

ることで、国内外からの来訪者に対する説明責任を果たそうとする姿勢が感じられた。



<写真2 相川郷土博物館入り口の案内パネル(筆者撮影)>

<写真1(筆者撮影)>日韓首脳共同記者会見における岸田文雄 内閣総理大臣の冒頭発言(抜粋) 2023年5月7日 ソウル

「私自身、当時、厳しい環境のもとで多数の方々が大変苦しい、そして悲しい思いをされたことに心が痛む思いです。日韓間には様々な歴史や経緯がありますが、困難な時期を乗り越えてきた先人たちの努力を引き継ぎ、未来に向けてユン大統領を始め、韓国側と協力していくことが、日本の総理としての私の責務であると考えております。」



<写真3「朝鮮半島出身者を含む労働者の出身地」(筆者撮影)>

3 歴史像の伝え方(1)~佐渡市相川郷土博物館の場合

実際に佐渡市を訪れると、世界遺産登録に関する祝賀ムードは控えめの印象を受けた。その中で訪れた佐渡市相川郷土博物館には、一際物々しく、上の写真1が飾られていた。そして、この写真を中心とした一室(2FのD展示室)に、朝鮮人労働者の関係の展示物が集められていた。右の写真2が示すように、博物館入り口の展示室説明パネルでは、このD展示室について、展示内容の説明書きと思われる部分に「朝鮮半島出身者を含む鉱山労働者の暮らし」と書かれた紙が貼られていたことから、先に引用した日本政府のコメントの下線部イにあるような、追加された展示物が(世界遺産登録のため?)集められたと思われる。展示物の中には確かに、朝鮮人労働者が一定数存在したことについて言及した、写真3のような展示パネルがあった。その解説文には、単なる人数のデータを示すだけでなく、戦時体制の下で「募集」から始まって「徴用」に至る労働者の確保政策に関する説明や、昭和25年に帰国した朝鮮人労働者への賃金未払分が供託されたことなどにも言及があり、また、その解説文を英文に翻訳したパネルも一緒に展示す

(前略)労働者の出身地については、主に大正期の文献から作成されたリストをもとに、上位5位までの労働者数と出身地を見ると、長野(184人)、新潟(165人)、佐渡(96人)、石川(71人)、富山(52人)、本州以外の出身者では、朝鮮が21人となっている。(中略)1940年から1945年の終戦までに、佐渡鉱山の朝鮮半島出身労働者の総数は1,519人であったと記録する文書がある。また、1,140人分の朝鮮半島出身労働者への未払い賃金が供託されていたことを示す文書もある。(「帰国朝鮮人に対する未払賃金債務等に関する調査について」より)

その他にも、相川に存在した「第4相愛寮」に暮らした朝鮮半島出身の労働者の存在や、鉱山で働く朝鮮人労働者が特別高等警察から監視されていたことを示す資料なども展示されており、「鉱山労働者」の日常の中に、朝鮮人労働者の人たちが根付いていた、という記憶を伝える展示として、貴重なものと言えるだろう。

しかし、訪れた人が同時に味わうのは、日露戦争以降日本によって本格的に進められていった、朝鮮半島への進出や、遼東半島を足がかりとする満州地方への進出によって、日本の支配下に組み込まれざるを得なかった人々の歴史に関する情報の、圧倒的な欠落である。その思いで改めて日本政府代表がユネスコの委員会で発言した「全ての労働者の過酷な労働環境を説明し、その労苦を記憶に留めるため、現地の説明・展示施設において、全ての労働者に関する新たな展示物を既に展示した」という文言を見返してみると、なるほどそこには文字通りの鉱山労働者としての朝鮮半島出身者の姿が展示されているが、近代化に伴う日本の帝国的発展とその影響による(佐渡鉱山における)朝鮮人労働者の生活苦や労働争議など、植民地支配が背景となって発生した出来事について、関連性を示そうとはしていない。

また、相川郷土博物館を訪れた人が、日本の植民地支配の歴史に詳しいわけではない場合、隣接の展示スペースで、鉱山労働者として朝鮮半島出身者が味わった生活の厳しさを知ったとしても、それは戦争中の数年間のことであり、その印象は強く残らないかもしれない。なぜならば、写真2に示したように、博物館の「朝鮮半島出身者を含む鉱山労働者の暮らし」の展示スペースに隣接して「佐渡鉱山の労働と福利厚生」の展示スペースが設けられているが、そこでは、たとえば下の写真4のパネルが置かれている。

労働条件と福利厚生
Working conditions and welfare benefits

佐渡鉱山では、全国的に早い段階で福利厚生も充実し、労働条件も時代とともに改善されていった。

Sado Mine offered substantial welfare benefits earlier than other mines in Japan and working conditions also continued to improve over time.



佐渡鉱山で働く人びとの賃金は、職種によって異なり、さらに技術や経験が考慮された細かい等級に分けて支給されていた。

労働時間は、官営時代は1日10時間から12時間であったが、1896(明治29)年に三菱合資会社に経営が移ってからは、鉱山の労働時間は8時間に短縮された。昼夜交代から3交代となったが、鉱山の稼働には支障がなく、むしろ作業効率が上昇し、金銀の産出量が増加した。1945(昭和20)年以降は、法律で1日8時間、週48時間の労働に定められるとともに、労働組合の結成により、賃金増額と待遇改善が図られた。休日は日曜日とし、正月・鉱山祭りなどは連休が設けられた。

また、1887(明治20)年には「慈善金」と呼ばれる相互扶助制度を全国的にいち早く導入し、労働者の総利からの拠出金を運営とする施設料が、業務上の災害で負傷した者や退職した者等に支給された。1905(明治38)年には、鉱業法に基づき労働者に対する医療費や遺族手当などの扶助が経営者に義務付けられた。

なお、三菱合資会社に経営が移った後は、新築や民家の買上げにより、従業員用の住居も提供されている。

<写真4「労働条件と福利厚生」筆者撮影>

「佐渡鉱山では、全国的に早い段階で福利厚生も充実し、労働条件も時代とともに改善されていった。」

その解説文によると、福利厚生の充実を示す事例として、3交代制の導入による労働時間の短縮や相互互助制度の取り組みなどが示されるとともに、経営が三菱合資会社に移るとさらに賃金などの改善が見られたことが述べられている。その他にも、鉱山労働者たちの平和な生活ぶりを示す展示が示されており、まるで労働争議などは存在しなかったかのような印象を与えている。こうした展示の「工夫」は、写真3の解説文にもあるように、他の地域からやってくる鉱山労働者や朝鮮半島からやってきた鉱山労働者がともに福利厚生を享受していたかのような印象を与えるかもしれない。

竹内康人は岩波ブックレット『佐渡鉱山と朝鮮人労働』を著し、1990年代から進んだ朝鮮半島出身者の鉱山労働の実態の掘り起こし運動とその研究成果を紹介している。一方で、そうした研究に対して「強制労働否定論」が主張されていることについても言及している⁶。世界遺産登録のためには、政府が推薦しなければならないため、展示内容にも政治的な主張が入り込む余地は大きいと考えられる(何より写真1の扱われ方が、それを象徴している)。したがって、相川郷土博物館の展示構成を博物館の責任として責めるわけにもいかないのだろう。

4 歴史像の伝え方(2)～「史跡 佐渡金山」の場合

「佐渡島の金山」の様子を最も直接的に伝えているのが、坑道跡に入ることができる「史跡 佐渡金山」である。現在は「株式会社ゴールデン佐渡」が経営している体験型の観光施設で、江戸時代の手彫りによる採掘の様子を人形によって展示している施設などがある。近代の坑道の方は、西洋技術を導入した後の坑道や機械類などが残っている。真夏でも気温が10度以下になることもあるという薄暗い坑道跡を辿るのは、その往時の現場を思うと心身ともに寒くなる体験だった。また、グッズや関連商品の販売施設は世界遺産登録の効果なのか、なかなかの賑わいだった。

ここを訪れた人は、金銀の採掘に伴う坑道の労働や技術の進歩といった内容を体験的に知ることができる。一方で、満州事変以後の戦時体制による兵力増員の影響により、鉱山労働者も出征しなければならず、その不足を補うために朝鮮半島から労働者が集められ、戦後は賃金も払われずに朝鮮に帰国させられた労働者がいたことは、伝わってくることはないだろう。

4 まとめ

以上断片的な紹介になったが、「佐渡島の金山」の世界遺産登録は、喜ばしいニュースであると同時に、鉱山労働が支えた大日本帝国の過去の歴史について、「私たち」は世界に向けてどのように伝えていくことが期待されていくのか、答えのない問いを持ち帰る巡見であった。それは第二次世界大戦後50周年を迎えるにあたって、アメリカ合衆国のスミソニアン博物館が、かつて原子爆弾投下に使われたエノラ・ゲイ号の機体を復元展示しようとした際に、原爆投下の評価をめぐる論争が起き、企画が大幅に修正されて館長も更迭される事態を招いた⁷あたりから、歴史展示と政治の関係性が問題となって続いていて、今も「私たち」の日常の中に影を落としている現実を見ることであった。

後日談になるが、先に引用したユネスコの委員会における日本政府の発言にあった「佐渡島の金山」における全ての労働者のための追悼行事が11月に行われたが、当初韓国政府の代表も参加し日韓合同で実施予定であったところ、急遽、韓国政府は別日程で、独自に現地で追悼行事を行なった。日本政府の代表として追悼行事に参加した政治家が、過去に靖国神社へ参拝したことが韓国側で問題視された、と報じられ、その参拝報道が事実誤認であったことを、配信元の共同通信社が認めて謝罪するという展開になったが、日経新聞は、そのことだけに問題が収まるものではなく、韓国側の旧植民地時代に強いられた労働についての認識が、日本との間に溝があると報じている⁸。日韓の政治家同士がいわば政治決着のような形で世界遺産に登録された「佐渡島の金山」であるならば、日本の岸田総理はすでに自民党の裏金問題などで国内の支持を失い退陣し、相手側の韓国のユン大統領も支持率低下が顕著となっている現状で、今後も日韓双方の対立の舞台となる危うさが懸念される。

「歴史総合」の授業において今回の巡見の成果をどのように活かすのか、という点については、自分の能力の問題でまだ明確なヴィジョンを描けていないが、「佐渡金山の鉱山事業の近代化」をトピック的に焦点を当てて取り上げるよりも、最後の目録Dの「(4)現代的な諸課題の形成と展望」において、アジア諸国の脱植民地化や民主化の動きと関連して、日本の近代から現代を貫く永続的な問いの題材とするのが相応しいような気がしている。そこには、先に紹介した関東大震災の犠牲者への都知事の姿勢も関連するであろうし、北海道における炭鉱労働者の実態や、地元の手稲金山の労働者の実態なども関連させることができそうである。末筆になるが、タイムリーかつ有意義な巡見を企画していただいた事務局の皆様へ、深い感謝の意を表して拙稿を閉じたい。

注1 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説地理歴史編』2018年、文部科学省

2 小川幸司・成田龍一編『シリーズ歴史総合を考える①「世界史の考え方」』p.281・282より、2022年、岩波新書

- 注3 令和6年7月27日付ユネスコ第46回世界遺産委員会における「佐渡島の金山」の審議に際する日本政府代表ステートメント 外務省公式HP、
https://www.mofa.go.jp/mofaj/pr_pd/mcc/pageit_000001_00944.html
- 4 2023年8月17日付朝日新聞デジタルの記事より、
<https://www.asahi.com/articles/ASR8K5600R8KOXIE01J.html> 参照
- 5 衆議院第195回国会における初鹿明博議員の質問参照。質問は、衆議院公式ホームページ
https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon.nsf/html/shitsumon/a195009.htm、
 回答は、同ホームページ
[https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon_pdf_t.nsf/html/shitsumon/pdfT/b195009.pdf/\\$File/b195009.pdf](https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_shitsumon_pdf_t.nsf/html/shitsumon/pdfT/b195009.pdf/$File/b195009.pdf) 参照
- 6 岩波ブックレット No.1069「佐渡鉱山と朝鮮人労働」第5章、2022年、岩波書店。なおこの主張の代表的な人物として、地元の衆議院議員を務め安倍内閣以降内閣や党の中堅的存在だった自民党の高鳥修一氏がいる（裏金問題により党の比例重複から外れ、第50回総選挙で落選中）。
- 7 マーティン・ハーウィット著（監訳：山岡清二）『拒絶された原爆展 歴史の中の「エノラ・ゲイ」』1997年、みすず書房 参照
- 8 日経新聞デジタル2024年11月27日付配信『日韓の「埋まらぬ溝」浮き彫り 佐渡の金山、騒動の背景』
<https://www.nikkei.com/article/DGXZQOGM2673Z0W4A121C2000000/参照>

新潟・佐渡を旅して

北海道札幌手稲高等学校 伊藤 仁志

8月4日

冷房の効いたバス下車後、本州のさすがの暑さを感じながら巡検がスタートした。「みなとびあ（新潟歴史博物館）」では北前船に関する特別展が開催



されていて、学芸員の方の解説を聞きながら見て回った。前前は札幌での菅原氏の講演を復習しているような場面が多く、頷きながら歩いていたような印象がある。終盤になって海難の話となり「髻額」についての説明があった。海が荒れてもうだめだという時に、船乗りたちが命の次に大事な髻を切って祈り、無事帰着いた船が船乗りたちの髻を絵馬に結んで奉納したものだ。実はもう30年も前の真冬、青森深浦町の寺にある江戸時代の「髻額」を実際に見たことがあって、それ以来北前船イコール常に命がけの危険な仕事と思っていた。しかし札幌での講演で江戸時代の北前船は真冬に運行しないと知り、少しほっとしたのが数日前であった。今回は新潟市内の船主たちの豪華な邸宅や船乗りたち関係者の集落などを実際に巡って見ることもできた。それらを可能にする北前船がもたらす富が当時相当に大きいものだったことが展示の中で見られる数字以上にわかる。いろいろ考えると船乗り以外の多くの人たちを巻き込む遭難は、夏であろうとやはり恐怖だったに違いない。当たり前のことだが。

北前船が衰退するのは電信の利用が始まったからと最後の方で知る。なるほどと思う。

後日、鮭鱒の取引のためロシアへよく行く新潟出身の友人に、今回の巡検のことを話す機会があった。彼は北前船と電報の関係もよく知っており、取引には情報が重要で今も昔と同じことをやっていると。情報をどう生かすとかは聞けなかったが、同じような商業が続いていることに改めて気づき、北前船は今でも姿を変えて活躍しているのではないかと、そんなことを思いついて、札幌・新潟・佐渡と続いた北前船を知る旅に満足していた。

歴史博物館には、信濃川火焰街道連携協議会なる組織の発行した「なんだこれは」というタイトルのパンフレットがあった。実は新潟については火焰土器のイメージも強くあった。開いてみると教科書に載っているもの以外でもかなりある。造形の不思議さ奇妙さはやはりすごいと思う。国宝指定もわかる気がする。そしてこれらが信濃川流域でこそよく見られるということが述べられていた。まさに「火焰街道」なのだそうだ。そういえば遮光器土器も青森の木造だ。思い込みだろうけれども、冬の厳しい地域にこそ芸術家がいるような気がする。

常設展を見ると、新潟はそこに住む人々が水と戦い続けた地であることがわかる。本館を出ると「みなと・さがん」の船着き場あたりから水上バスが出て行く様子や、信濃川沿いの朱鷺メッセなどの建物を眺めることができる。川幅の広さと岸に並ぶ建物群が単純にすごい。火焰土器の大昔から今に至るまで、川と暮らしその水と戦った人たちの長い歴史があるはずで、その苦勞を想像できるほど深入りして調べてみたくもあった。後日に阿賀野川をバスで渡ったときも、信濃川より広いと思えるその川幅に驚いた。



8月5日

佐渡へは餌を求め新潟港の鳥たちとともにフェリーで渡る。両津湾に入ると海が落ちつき、北前船の船乗りたちの気持ち少しだけわかったような気になった。

トキの森公園では、最後の野生のトキは抵抗せずにおとなしく抱きかかえられて捕獲されたこと、餌付けして捕獲した人ののちのちまでの後悔の思い、飛び立ってけがを負った「キン」の最後など、パネル展示を読みながら感動してしまった。結果はすぐに現れないことをわかっていて、それでもこのような命を育む活動に辛抱強く取り組む人を尊敬する。北海道でも丹頂鶴が増えた。日本各地の空を飛ぶトキを見られる日が来ればと思う。



順徳上皇の御所跡を経て、世界遺産に登録されたばかりの佐渡金山エリアに入る。

相川郷土博物館は明治以降の佐渡鉱山の運営に関する展示であった。全体的にコンパクトで

はあったが、朝鮮半島出身者に関する展示もあり、トータルで充実感があった。そこから少し離れた北沢浮遊選鉱場跡の眺め

は圧巻であった。佐渡に金山があったことは長いこと知識として持っていた。しかしそうであっても、なぜこのような場所にこれほどまでの規模の工場があるのか、失礼な言い方だがそういう意外感が、目にしたときの感動を大きくしたと思う。浮遊選鉱を後日調べると、粉碎した岩石粉と界面活性剤を水槽に入れて取り出したい金属を抽出する方法、らしい。

佐渡奉行所跡は江戸幕府の威信を示すさすがの規模であった。一番の見どころは、金を取り出し加工していく勝場（せりば、工場）だったと思う。金の含まれた岩石を砕き、砂金の選別と同様に水を利用した比重選鉱で金を取り出すのだが、一粒たりとも見逃さない金採取の執念にはたまげた。それでも江戸時代以降の使用済み岩石粉から、かなりの量の金を採取したのが浮遊選鉱というのだからすごい話である。

佐渡金山では夏でも寒い宗太夫坑（江戸時代）と道遊坑（明治期）を見学する。宗太夫坑では江戸期の採掘を人形が再現している。当時はもっと暗い坑内で、強い圧迫感を心身ともに受けながら人々は働いたと想像する。自分たちが採掘した金が見るく美しい地金になるなど、見たこともないはずだ。坑道から出ると、金に見まがう土産品などを販売する売店や博物館的施設を見ることができる。世界遺産登録はされたが、今後これ以上の商業化を少しだけ心配した。



けていた集落の機能捨てようとしても捨てきれない文化の重みいつまでも持ち続けた家族との絆」とある。家屋の構造もなるほどと思ったが、宿根木ではこうした文言を書いた人たちの思いを感じることができた。夏休み中なので中学生ガイドが観光客に町の案内をしており、頑張っている姿を見るのも嬉しかった。

8月7日

村上市で鮭の加工場が印象的だった。こうした海産物が吊り下げられているのを見ると、どうして腐敗しないのだろうというつも思う。三面川に鮭を回帰させたのは村上藩士青砥武平治という。切腹をイメージさせない腹の開き方というが、二段腹ではないかなど余計を考えた。村上でも鮭は減少しているという。温暖化がすべてではないと思うがここ数年の変化は急激であると感じる。本当に旨い村上の鮭を食べた経験はないけれど、風土や文化がこんなことで失われてよいわけではない。本気で気候変動に取り組む時が来ているのではないか。

教員生活を振り返ると、授業や面談、保護者との会話といった場面でも、巡検や個人的な旅を引き合いに出すことがけっこうあった。語る場合は熱が入るし、実際に行った、この目で見たと言えば顔の上がる生徒も多かったのも、それなりの興味を持って聞いてくれたのかなど思っている。伝えたかったのは、歴史でも何でも、自分の目で見て耳で聞き、最後に自分の頭で考えることが大事、ということ。自分の考えを今すぐ持つということではなく、ゆくゆくそういう姿勢を培ってほしいということで、そうした先に自己実現があると思うからだ。

昨今は、教員に指示されないと考えない、手にした小さな画面から根拠のあやふやな自分好みの情報を真に受けている、そんな子どもや生徒が多くなっているように思う。だとすると実体験を語ることがいよいよ大切だと思う。自分の視界の外に知らない世界があり、その世界には過去からの時間の積み重ねがあること、望めばそれに向き合えること、そして向き合うことがやがて自分を豊かにすることを伝えていかなくてはと思う。

そう簡単に旅のできない高校生には、少しでも刺激になるようなことを伝えたい。伝えるためには自分も旅の人にならないと枯れてしまう。今回の巡検では語らにも楽しく、旅を一層豊かなものにしていただいた。荻島会長はじめ同行の先生方に心より感謝申し上げたい。

8月6日

佐渡博物館、順徳上皇の真野御陵の柵を眺めた後小木に向かう。

小木ではまず復元された「白山丸」を見学した。75トンと少しの積み荷が可能な五百石船である。重視されているのは船乗りたちの快適さより荷物のことで中に入るとそれがよくわかる。大きな倉庫の中で帆柱を寝かせた状態で展示されていたが、しかしいったん海に出ると決して大きくはないと思う。大正時代の古い校舎を利用した民俗博物館では、過去の生活や仕事に関わる道具を見ることができた。ガイドの渡辺さんが通った学校だそうだ。

宿根木は、北前船に携わる人々によって形成された集落である。1ヘクタールくらいの狭い敷地に、百十棟の家屋が建つそうだ。小高いところから集落全体を眺め、狭い小径を使って降りた。船主や船大工の家もあったがJRの広告撮影にも使われた三角屋が宿根木を象徴している家屋であろう。平成8年まで高齢女性が住んだあと、渡辺さんたちが整理したと聞く。知人宅の死後の整理など切ない作業だ。パンフレットにも「忘れか

巡検スナップ集

【千石船】



【佐渡金山坑道内】



北海道札幌北高等学校 千田周二先生 撮影

【佐渡金山坑道入口】



【トキ】



【宿根木】



【順徳天皇火葬塚】

